
IS <インフィニットストラトス> 成層圏を狙い打つ男

片翼の鍵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS<インフィニットストラトス>成層圏を狙い打つ男

【Nコード】

N0813U

【作者名】

片翼の鍵

【あらすじ】

IS - 女性にしか動かせないマルチパワードスーツ。

しかし、それを動かしてしまった男「織斑一夏」

しかし、それよりも前にISを動かした男がいた!!

ハイスピードタバタ学園アクションラブコメディー始めます♪

この作品は前に作っていた作者のHPで載せていたものです。

またHPに載せるかも？

設定（前書き）

設定です。

厨二病だとか気にしたら負けだぞっ♪

設定

レオン・アルファード

年齢：15歳

イメージCV： 谷山紀章

髪：長くて真紅に染まっている。

髪型：ストレート。でも時々髪留めで一つにまとめている。（イメージするならステイル・マグヌス。）

瞳：深紅

身長：206cm

体重：67kg

細かい設定：

本作品の主人公で男。狙撃の腕が天才的なためロックオン・ストラトスの異名をもつ。

一応、転生者・・・というよりは前世で死んで気が付いたらこの世界で生まれ変わっていた。

やや女顔。そのためよく無理やり女装させられる。

そのため女性が苦手であり素で接することが出来るのは今の所、イリス・コリングとナターシャ・ファイルス、織斑千冬と篠ノ之束だけである。

ハッキングの腕は束を超えるほどであり、他の分野でも劣ってはいても引けはとらないくらいにある。
専用ISは『デザートストーム』。

デザート・ストーム

レオンが自分手で作り上げた専用機。

小さい頃にレオンが束が作っていた未完成の展開装甲のデータをサイトを見ていたつもりでハッキングしてゲットしたものを改良して、全身のフレームに使用している。

途中から束も製作に加わっており、スラスターやその他性能が異常なじりや馬になっている。

機体色はモスグリーンと黒。

コアは束が特別にくれたもので登録していないコアである。

待機形態はライフルの玉を模したネックレス。

『武装』

ヘルストーム

デザートストームの標準装備である45口径ビームライフル。

緊急時には展開装甲を展開させてビームソードを展開可能である。

デザートストームの主兵装。

ツインウィンド

デザートストームに搭載されている主兵装。

ビームピストルであり、銃口下にビームサーベルを発生させることが出来る。

モデルはガンダム○○のケルディムのビームピストル（見た目だけ）

ファンゲ

デザートストームの腰にあるバインダーの中に収納されている10基の近接戦用ビット。

ビームの刃と実体ブレードの使い分けが可能だが、普段は6基しか使用せず、残りは収納していて緊急時のみ使用している。

モデルはガンダム00のファンゲ

スコルハティ

デザートストームの肩にあるバインダー兼スラスターの非固定装備アンロックユニットの内側に収納されている8基の遠距離用ビット。

こちらもビーム兵器だが基本的には使わず、スラスターとして使っている。

ソニックブレード

デザートストームに搭載されている唯一の近接格闘装備。

展開装甲が搭載されていて、展開することによって実体ブレードとビームブレードを使い分けることが出来る。

基本的に脚の装甲の中に隠している。

イージスシステム

腕の展開装甲にのみ搭載されたシステムでシールドの代わりになる。防御力は鉄壁を誇る。

しかし、エネルギー系のため零落白夜などには弱い。

『ワンオフアビリティー』

トランザム

一定時間だけ機体性能を3倍まで上げる能力。

使用後は一定時間使用できず、機体の性能も低下する。

やっぱり元ネタはガン・ム〇〇の「トランザム」

設定（後書き）

一応、転生者だけど、そういう描写は少ないです。
ごめんなさい。

ブログ（前書き）

ああ、ついにやってしまった。

他の作品を書いているのに浮気とは・・・無念。
では、どうぞ。

プロローグ

・・・6年前・・・

雪が降り積もっている公園には2人の子供がいた。

「待たせたね。ボクに一体何の用だい？」

「えっと、それはその・・・」

「えーっと君は誰だったかなあ？」

確か、緋河さんだったっけ？」

緋河さんとよばれた少女はこたえた。

「はい。あの・・・、緋河 奏です。

今日はレオン君に言いたい事があるんです」

「何を言いたいんだい？」

「それは・・・その・・・／＼」

彼女は決めたのか息を整えて言った。

「私はあなたのことが、レオン君のことが1人の異性として好きです！」

それを聞いた彼は言った。

「その気持ちは嬉しいよ・・・でも、その気持ちは受け取れない」

「な、んで・・・？」

彼は答えた。・・・とても悲しそうに・・・。

「ごめんね・・・。答えられない理由があるんだ・・・」

「そう、なんだ・・・」

「それじゃ、さようなら」

「うん。じゃあまた明日ね」

「もう会うことは無いんだけどね・・・」

彼が何か呟いたようだが彼女には聞こえていなかったようだ・・・。
その白く染まった公園でまたひとつの恋が終わりを告げた・・・。

・・・それから2年後・・・

「!?!?ッ、はあ、はあ、はあ」

そこには1人の少年がいた。

真紅の肩まである髪をストレートにしたまま、何の手入れもせず
ほうっとおいておるために所々跳ねている。

「あのことはもう振り切ったつもりなんだけどな・・・」

どこか悲しげに揺らいでいる瞳は綺麗な深紅をしている。

「・・・早く準備をして・・・今日は確か特別に『IS』の製作に
加えてくれるんだったな」

IS―正式名称『インフィニティストラトス』。宇宙進出を目指し
て作られたマルチパワースーツである。

しかし、これには欠点がありこのISは『女性にしか動かせない』。

「・・・早く行こう。ナタルさん達が待ってる・・・」

彼はそこを出て、研究所へ向かって行った。

プロローグ／起動

レオンSIDE

はじめまして。レオン・アルファードだ。

今ボクはISの研究所にいる。

さらに付け加えるなら此処は日本ではなくアメリカであるということだ。

「・・・あ！レオン君ようやく来たわね」

この人はナターシャさん。ボクが普通に接することが出来る数少ない女の人だ。

「すいません。少しだけ遅れてしまいました」

「気にしないで。それよりもどうりに話したら？そっちの方がお姉さんは好きよ？」

「うん、わかった」

「それじゃあ、行きましようか」

「うん！」

ボクらは研究所の中に入った。

そういえば、今回はいつもデータだけだったのに実物を見せてくれるらしい。

「そういえばボクの事って政府には秘密でやってるんですよね？」

どうやらボク存在は此処では秘密になっているらしい
そんなボクを政府の監視などがある中に出していいのだろうか？

「大丈夫よ。そのことは政府に許可を取ってあるわ」

「流石ナタルさん。行動が早いです」

「それはそうと、着いたわよ」

扉が開いて中に入ると黄色と黒が印象的なISがハンガーに固定されていた。

「おう、坊主来たか」

「イーリさん。久しぶりです。そういえばこのISってイーリさんが乗る予定でしたっけ？」

この人はイーリス・コーリングさん。ナタルさんと同じでボクが話せる数少ない女の人だ。

「おう。今回は特別だ。好きなだけ見てってくれ」

「じゃあ、遠慮なく」

ボクはそのIS‘ファング・クエイク’にさわった。

「！！！！？」

キンツと金属質の音が頭に響く。

「え？一体何が？」

気が付いたらボクは、ハンガーに固定されていた。

「嘘・・・」

「マジかよ・・・」

ボクはISを纏い動かしていた・・・。

そんな状況下でボク達は・・・

「おい坊主、好きに見ていいとは行つたが動かしていいとは言つてないぞ」

「もしかしてレオン君は女の子だったの？」

「これは夢だこれは夢だこれは夢だ・・・」

――現実逃避をしていた・・・。

プロローグ（後書き）

今回は主人公がISを動かす所まで書きました。

・・・というかナタルさんたち登場すんのはや！

0 話（前書き）

はい！

出来上がりました0話。

hellhoundのほうも出来てないのでこっちはかりが進む・
・。

0 話

あの事件から1日たった……。

結局何回も調べたがISを動かしたという事実が変わらなかった。

0 話 / 起動その後

ボクの名前はレオン・アルファード。

何故か知らないけどISを動かしてしまった‘男’だ。

ちなみにこの事はあの場にいた人だけの秘密で機密情報になってしまった。

これから一体、どうなってしまうんだろうか……。

「はあ……。」

「ん？レオン君！早く来て！」

ん？ナタルさんだ。一体何のようだろう……？

「何のようですか？」

「それはね……レオン君には地図にない基地>イレイズド<に所属して欲しいの」

「それは……それは政府からの命令ですか？それとも、貴方の思いですか？」

……。

沈黙の時間だけが過ぎていく。

「そ、それは・・・」

「政府の・・・意思なんですね・・・」

ボクが言ったときの顔は多分、いや、かなりゆがんでいたと思う。
でも、譲れなかった。

「なら・・・さようなら、です」

ボクは此処を立ち去る。

それが、迷惑をかけないためのけじめだと思うから・・・。

「（これからどうしようかな・・・）」

ひとまずは今日の宿の確保から始めなければならない。

おそらく家はもう政府の奴らに張られているだろう。

「（パソコンや重要なものとか持ってきていて正解だったな・・・。
）へぶ！」

思考の渦に飲み込まれながら歩いていたら何かにつかかってコケた。

「いったゝ。ん？これは・・・ウサ耳？」

そこにあつたのは地面に埋まつたウサ耳と丁寧に日本語で書かれた
「これを引っ張ってね。いい事が起こるかもよ」と書いてある看板だった。

「（引っっこ抜いてみるか・・・）」

どうやらボクの考えはアメリカにいた所為でアメリカンになっているようだ。

スポッ

「何にも無いじゃないか・・・」

そういつて帰ろうとして歩を進めたとき、後ろに何かが落ちてきた。

ドガンー！！

「はっはっはっはっはっ引っかったね、れーくん！！」

どうしようボクには幻覚が見えているようだ。

「さあ、行こうか！！」

「え？ちよ、待つ・・・」

ボクは出てきたその人に強制的に連れて行かれた。

まあ、住む場所を貸してくれるならいいかもしれないが・・・。

（数分後）

・・・

「で、改めて聞きます。

貴方は何故ボクを連れてきたんですか？」

「簡単だよーくん。男なのにISを動かし、私のパソコンに『ハッキングを仕掛け』成功した君に興味

がわいたからだよ！」ハッキング？そんなの何時やったっけ？

「とういかまず、知り合いでもないのに何故ボクの名前を知ってるんですか！？」

「天才束さんに不可能は無いよぶいぶい」

左様ですか・・・。

「とりあえず此处にいて私の研究の手伝いをするなら衣・食・住・専用機の全てをあげるよ」

専用機も・・・？

ていうか専用機を入れた所為で語呂が凄く悪くなってるし・・・。
それに衣食住の不自由も無いならいいかもしれない

「わかりました。その条件呑みましょう」

「そう！れーくんならわかってくれると思ったよ！」
でも・・・

「その代わりボクの専用機はボク自身の手で作ります。いいですか？」

専用機を自分自身の手で1から作る。これがボクの夢だった。
この人は要求を呑んでくれるだろうか？

「いいよ。君みたいな子が入るならその程度の要求は呑んであげる」

「よし！」

よかった。この要求が飲まれなかったらどうしようかと思っていた。
「ただし！データはもらうからね」

「OK。よろしく願います」篠ノ之束、博士」

「OKよろしくねーくん。あと私のことはぶりていたば・・・」

「わかりました。よろしく願います束さん」

「ぶーぶーれーくんのいけず」

こうして住処と新しい研究所？を手に入れた（この場合は与えても
らったというべきかも知れないが）
というか、プリティ束さんて何・・・？

0 話（後書き）

はいつという訳で今回は束さんと主人公が出会いました。
今回はオリキャラであるヒロインのデータをのせようかと思っています。

緋河 奏（ひかわ かなで）

年齢：15歳

イメージCV：堀江由衣

髪：少し薄めの紅

髪型：肩に掛かるか掛からないかくらいの長さのショートカット
（イメージするなら美嶋紅音（変身後））

瞳：赤

身長：156cm

体重：「黒く塗りつぶされている・・・だと」

スリーサイズ：言えないけれども凄くスタイル抜群！

細かい設定：

今作のヒロインで女。

小学校時代日本にいた主人公に一目惚れしており告白したが振られた。

しかし、本人はまだ主人公のことを諦めていない。

いかがでしたでしょうか？

では ノシ

1 話（前書き）

久しぶりの更新です。
どぞ。

1話

束さん曰く、「君も学校に行くべきだ!」と、ボクは、「名前ではれるでしょう!」と対する束さんは「なら名前なんて捨てなさい」である。

なんという無駄な口論・・・。
しかし、中身はかなり重要である。

1話/名前・・・

「名前か・・・」

レオン・アルファード・・・この名前にはいろいろな思い出がある。

父さん、母さんに怒られたとき、褒められたとき、その他いろいろなとき・・・。

ナタルさんや、イーリさんに・・・いやイーリさんは違うか・・・に呼ばれたとき。

その時その時が詰まっている。

名前を捨てるということは、つまりその思い出も捨てるということ・・・。

—— そんなこと・・・できるだろうか・・・？

そんなとき、ボクは1人の少年に出会った。
名を「五反田 弾」といった。

彼はボクにこう言ってくれた・・・

・・・「なら、全部背負って変わればいいじゃんか？」と。

彼の言葉・・・それが決意の言葉になった。
名前を持ったまま変える。

「どーだい？きまっただかい？」

「はい。東さん・・・」

ボクは名前を変える」

「それでいいんだね？」

「ボクはその記憶を持った他人になるさ」

もう十分そんなだから。

「よし！東さんがいい名前を付けてあげる！！」

・・・嫌な予感しかない・・・。

「・・・クイン 秦 シャラン 刹狼だよ」

「・・・何故に中国系でそんな名前・・・」

「ん？なんとなくなかつこよかったから！」

「・・・左様ですか・・・」

でも・・・

「それでいいか。」

わかりました。これからボクは刹狼だ」

「じゃ、しゃーくんは学校に行つてね？」

「わかった」

~~~~~次の日~~~~~

いくしかないよな・・・。

ボクは今、教室の扉の前にいる。

「今日は転校生が来る・・・刹狼、入れ」  
「失礼します」

今の容姿はばれないように髪を襟元で一つにし、眼鏡をかけている。  
これなら地味で印象に残らないだろう。

クインシヤラン  
「秦刹狼です。よろしくお願いします」  
「刹狼はまだ日本のことをあまり知らないそうだ。仲良くしてやってくれ」

～シヤランSIDE OUT～

～一夏SIDE IN～

よう、織斑一夏だ。

誰にいったんのかわかんねえけどよろしく。

ファゼンイン  
つい先週鈴（鳳鈴音っていうんだが）が転校していったばかりなのに  
なのに、だ。

転校生が来るらしい。  
それも、中国人の・・・。

「はあ・・・」

「刹狼は織斑の隣の席だ」

「わかりました」

はあ！！？転校生が隣の席！！？  
どうなるんだ・・・？

「秦 刹狼です。織斑君ヨロシクね？」

「あ、ああ。よろしくな？」

・・・以外と真面目そうだな・・・。

～一夏SIDE OUT

～おまけ～

「なんかしゃーくんってシャークみたいで格好いいよね」  
「東さん、そんなに考えたんですか・・・」

・・・。。。

「いえすおふこーす」

「はあ・・・さいですか・・・」

## 2話（前書き）

2話目ついに更新！！

今回ははじめてヒロインの視点を入れてみました。

続きはできれば今日中に更新します。

では、どぞ！

## 2話

学校一日目の今日。とりあえずは友達作りからしたいと思う。  
というか明らかに知り合いなのがぼつぼつと居るんだが……。

### 2話 / 友達

「織斑」

「なんだ秦？」

「学校の中を教えて欲しいんだが」

「ほかに頼める奴はいないのか？それに一夏でいいぞ？」

あだ名でよんでいいのか……では

「こちらもシャランで構わない」

「そっか。よろしくなシャラン！」

「とりあえずは……」「一夏！」……？」

「おう。弾何の用だ？」

一夏にいきなり話しかけてきた赤毛（彼も人のことは言えないが）  
の名前はダン？と言うらしい。

「一夏。彼は？」

「おう。コイツは五反田 弾。俺の親友だ！」

「五反田弾だよろしくな」

「クイン シャランだ。シャランでいい。よろしく弾」

「おう。よろしく頼むぜ？……ってお前はあん時の……」

「君は……。どうりで聞き覚えがあると思ったらあのときの君か」

「おう。よろしくな」  
「よろしく」

とりあえずは友達が2人も増えた。これはとてつもない進歩だろう。  
というか、ダンって同い年だったんだな……。

~~~~~

「えーっとこれで最後だな」
「ありがとう。助かったぜー夏、弾」

一通り回ったためコレでお開きみたいだ。

「そういえばシャランの家って何処なんだ？」
「ボクの家かい？うーん。良かったら寄るかい？」
「お！いいのか！！？」
「いいよ。ただ来てもつまらないけど」
「おし！じゃあいこうぜ！！」
「じゃ、案内するな。こっちだぜ」

ボクらは家への道のりを歩き出した。

……つけて来ている人影に気づかずに……。

~~~~~シャランSIDE OUT~~~~~  
~~~~~

~~~~~とある女子SIDE~~~~~

こんにちわ！わたしは緋河<sup>ヒカワ</sup> 奏<sup>カナデ</sup>っていいいます。

今、とある事情で男の子の後ろを追っています。

その彼の名前は秦　しゃ、しゃ、しゃろ、シャラン君っていうんです。

・・・とっても言いずらいです・・・。

何故って聞かれてもちよつとある人に似てるからとしか答えられません。

ある人って言うのは私の初恋の人なのですが、結構前に振られて、彼も行方を絶ちました。

名前はレオン君って言います。

格好よくて、初めて虐められていた私を助けてくれたのは彼でした。最初はこの気持ちに気が付かなかったんですが、

後々から「ああ、好きなんだな・・・」気が付きました。

その時からですね。

でも、彼も朴念仁で、鈍感でした。

多分、告白しなかったら気が付かなかったんじゃないかと思います。

おっと、長く話してしまいましたね・・・と彼らがあるマンションに入っていました。

追いかけましょう・・・。

~~~~~カナデSIDE　OUT~~~~~

2話（後書き）

こっちでも次回予告をやるう・・・と思いましたが、こっちではいろいろな秘話を

キャラクターと一緒に暴露してみたいと思います。

ではシャラン君COME!!

「なんなんですか。」

此处では秘密話を大暴露したいと思います。

で、今回は君なので、ゲストとして君を呼びました。

「で、秘密って?」

実は最初は一夏と同じで剣一本で戦うつもりでした!!

「マジか・・・。」

マジだよ・・・でも、主人公が日本人じゃないからボツになりました。

次！主人公は初め、ハーレム予定でした。

「嘘だろ!!」

マジだよ。でもしかし、一途にしてみたくなつたからボツにしました。

最後！ぶちやけ、主人公の名前は変えるつもりはありませんでした。

「なんで？」

変えるのって微妙だから。

だがしかし！「昔にわかってるのに普通に表舞台にいたらなんか不自然じゃね？」

っていうのと「やっぱり最初は一夏だろ！」っていうのでボツにしました。

「意外と原作も愛しているからな。」

ということまで此処まで！

「誤字・脱字・間違い、意見があつたら指摘して欲しい。」

ついでに感想ももらえると非常に嬉しいです！

「じゃあ、次回も見てくださいよ！」

バイビィ ノシ

3話（前書き）

宣言とおり更新しました！
今回は凄く短いですがどうぞ！！

3話

「一夏、ここだ」

「え？このマンションか？」

3話／ようこそボクの家へ！

「ああ。でもその前に」

ボクはまず、入り口のセキュリティを通過する前についてきている
っぽい彼女に声をかけた。

まあ、気が付いたのはついさっきだけど……。

「付いてきてる人。早く出てこないかな」

「……気が付いてたの？」

「気が付いたのはさっきだよ。緋河さん」

うわお……微妙な再会……。

でもこれ、再会っていけないしなあ……ってそんなんじゃない。

「折角来たんだし君も入るかい？」

「え！いいの？」

「君が望めばいいよ。ただ、此处でのことは秘密だよ？」
「うん！」

うわ……眩しい笑顔……。

騙しているこっちは凄く罪悪感に見舞われるよ……。

「じゃあ、入ろうか」

カードリーダーにカードを通し、暗証番号を打つと扉が開いた。

「早くしないと閉じちゃうよ?」

「おお」

「はい」

彼女達がこっちに来たのを確認してまた同じようにロックをかけた。次にエレベーターに乗り、部屋に向かった。

チーン

「この階の端がボクの家だよ。ただ、全体的にセキュリティが凄いらから普通には入れないけどね」

「へ、へえ」

一夏の顔が微妙に引き攣ってる。

まあ、仕方ないか。

ボクはまた、部屋の前のカードリーダーにカードを通し、パスワードを打ち込んで鍵を開けた。

そして入って直ぐの扉で指紋検証、暗証番号、パスをやり、中に入った。

「これで……………」

ようこそ一夏、緋河さん。ボクの家へ!」

3話（後書き）

暴露コーナリーエーイ!!

今回のゲストは・・・「緋河 奏」さんです!!

「ど、どうも。」

やあやあ。今回は君みたいだね。

「は、はい。」

じゃ、始めようか。

実は！最初はモブキャラの予定でした！

「うええ!!」

しかし！以外にも、何故か作者の思い出がかなりあるキャラなので
ヒロインにランクアップさせました。おめでとう!!

「あ、ありがとうございます。」

次！実は最初は転生者の予定だった。

「？」

でも、なんか被るからボツにしました。

最後！実はヒロイン化決定のとき一夏ハーレムに入れるつもりでした。

「ええ!!?」

でも、結局シャラン君のことが好きな設定になりました。

~~~~~

どうだったでしょうか？

「誤字・脱字・間違い、意見など有りましたら指摘してください。  
あと感想などいただけると嬉しいです！」

「じゃあ、次回も見てくださいね？」

バイバイ!!

#### 4 話（前書き）

今回はこれを書くために相当Wikipediaさんを頼りました。

おかげさまでとても雑学的になっています。

あと、デユオ様感想ありがとうございます。

では本編どうぞ。

## 4話

「まあ、ちょっとここで待ってて、お茶とお菓子持ってくるから。  
一夏と緋河さんはなにがいい？」

「じゃあ、俺は緑茶で頼めるか？」

「私は紅茶で」

「紅茶はアッサムとダージリンとアールグレイがあるけどどれにする？」

「私はよくわかんないからおすすめで」

「ミルク？ロイヤル？ストレート？」

「それもおすすめで」

「わかった。一夏は緑茶、緋河さんはおすすめね。」

「じゃ、ちよつと待ってて。今すぐ入れてくるから」

### 4話／主人公によるお茶の講義

そういつて僕は準備にかかる。

緋河さんはアッサムのミルクティーにすることにした。

アッサムはインド北部産で水色は澄んだ濃い目の深い紅色である。

ミルクティーに適していて、甘い芳醇な香気を持ち、こくのある濃厚な味が特徴である。

以下Wikipediaより抜擢

うちにあるのは全部ファーストフラッシュであり、香りが強く、発酵も浅い。

うちは本格的な紅茶の道具をそろえており、入れ方は淹茶式<sup>えんちゃしき</sup>である。  
淹茶式は、ポットなどの容器に茶葉を入れ、熱湯を注いで蒸らし、

茶葉を濾別して抽出する方法で、家庭における一般的かつ本格的な方法といわれます。ティーバッグを用いる場合もこれに分類されるそうです。

以下Wikipediaより抜擢

おいしく紅茶を淹れるコツは、良質の茶葉を用い、新鮮なくみたての水を用意し、あらかじめよく温めておいたポットに茶葉を入れて緑茶の場合と違い、十分に沸騰（ただし、沸騰したてのもの）させた湯をすぐに注ぐことです。

ポットが冷めていては沸騰した湯も冷めてしまい、茶葉の旨みが抽出されにくいので、冬場は特に手を抜かないでおきたい。

茶葉を充分に蒸らし、葉が開ききってからカップに注ぎます。

ポットは蓋付きのものを用い、ティーカップもあらかじめ温めておくというそうです。

以下Wikipediaを参考

この入れ方は少し時間がかかるのですが、手軽にいい味がだせるから重宝します。

と、説明しながら淹れていたらもう頃合みたいでした。

紅茶をカップに入れ、ミルクを入れる。砂糖は好みで入れさせておけばいいだろう。

緑茶はポピュラーな煎茶でいいだろう。

煎茶は、基本茶葉は一番茶と二番茶の早摘みのものを用いるが収穫前に「棚」に寒冷紗などの覆いをかけて日光を遮る玉露とは異なり、終始露天で栽培されるそうです。

一般に70 前後のお湯で淹れ、1〜2分浸出します。

甘みと苦み・渋みの調和がとれるのが良いとされるそうです。

以下Wikipediaを参考

これで、お茶も全部入れ終えたので、自分のコーヒーを淹れたいと思う。

ボクが飲むのはエスプレッソで、イタリアでコーヒーといえばこれらしい。

エスプレッソは専用のマシンが必要で、うちではレバーピストン式を買っている。

レバーピストン式はレバー操作によって圧力をかけて抽出するため、抽出具合を見ながらの調整が可能である最も趣味性の高いマシンともいえる。

その分操作は難しく、高価なものが多いのが玉に瑕ってやつだ。

ー以下Wi

kikipediaを参考

自分の分も入れ終わったので持っていくか・・・。

「お待たせ。味わって飲んでね?」

#### 4 話（後書き）

ばくろこーなー。

でも今回は暴露じゃなくてちよつとした裏設定だよ。

「ふーん。」

「へ〜。」

シヤラン君はコーヒー派です。

でも、家には器具がそろってます。

「なんでだ？」

束さんが来たときに気まぐれで頼む飲み物が変わるから・・・とします。

「それは納得だな。」

でしょ？

で、奏ちゃんは紅茶派かな？

「なんで？」

なんか似合うと思ったから。

ちなみになんで今回の話がこんなになったかということ実は本編の進む方向が決まってるからです。

「馬鹿か（ですか）！！」「」

ひでぶ！！

ごめんなさい。でも大まかには決まってるんですよ。

細かい所がまだなんですよね。

「へ〜。」

~~~~~  
「今回も見てくれてありがとう。」

「こんな作者が書く小説だが見てくれて嬉しい。」

ちなみに感想を書いてくれると作者が燃えます。

じゃ、

「次回もまたみてくれよ（みてね）！！」

5 話（前書き）

前の話の続き。

今回はあの人が現れます！！

デュオ様、アンデルセン神父様感想ありがとうございます！

では、本編どうぞ！

5話

「ふん。美味しいなこれ！」

「ありがとう」

5話 / 現れたあの人 東さん

「でもなんで器具とか全部揃ってんだ？」

ギクウ！！

「い、いやあそれは・・・東さんが来たとき気まぐれであの人頼む飲み物変えるんだよ」

・・・の後は一夏にしか聞こえないように言った。

「嘘だろ！あの人俺達以外に興味を抱いた！」

「どうやらあの人バグコンのPCに始めてハッキングを成功させたかららしい」

「それこそ嘘だろ！んな規格外なことしたのかよ！」

「ああ」

「ねえねえ」

「なんだ緋河さん」

「あの人って？」

ピシピシッ！

空気が凍りついた。

「　　いいいいー夏どうしよう　　」

「　　ああああ、ああどうする？　　」

「　　ととと、とりあえず黙ってもらう方針で　　」

「　　ああ　　」

「　　？　　」

こいつは・・・ボクらが頑張ってるときに・・・！

「　　とりあえず話すけど秘密にしておらおう。それがいい　　」

「　　ああ。そうだな　　」

「　　ななななあ、緋河　　」

「　　なに？　　」

テンパリ過ぎてよびすてになっているが気にしない。
気にしないったら気にしないからな！！

（此処までの思考 0・03 秒）

「　　これから話すことは他言無用で頼む　　」

「　　う、うん　　」

「　　俺達はその、束さんと知り合いで・・・　　」

「　　あの人ってのは束さんのこと。OK？　　」

これで大声でも出されたら嫌だなあ。

「　　束さんて、あの篠ノ之束博士のこと？　　」

「　　ああ、そうだけど　　」

「　　うそ！？　　」

「　　ほんとなんだが・・・　　」

見事に一夏とハモった。

知ってる？ハモるってハーモニーが元になってるんだよ？

・ ・ ・ 知ってるか。

モ二るでも問題はない気がするんだが・ ・ ・。

まあ気にしない。

「つく」ときくをこえきざまれたかなしみのきおく
」電話か」

誰からってげえ・ ・ ・

「もしm「もすもす終日？」・ ・ ・」ブチッ

「な、なあ今の誰k「ま」すづくにうけとめるきみはひかりの
てんし」・ ・ ・ ってたか！」

「もしm「も・ ・ ・」切りますよ。「わ」待って待って！」・ ・ ・
はあ」

「みんなのアイドル束さんただいま参・ ・ ・ 待って待ってこんどこ
そ真面目にやるから！」

「で、なんの用ですか束さん・ ・ ・ あ」

「うそ！束博士！！」

「束さん！！？」

「ううん女の子のほうは知らないけどそこにいっくんもいるの？」

「一夏ですか？いますよ」

「じゃあ一回変わって」

「一夏、束さんがお呼びだ」

「変わります」いっくん。ひさしぶりだねー！！」・ ・ ・ はあ

「ちーちゃんは元気にしてる？」

「それはもう」

「そう。いっくんも頑張ってるね」

「はあ」

「じゃあしゃーくんと変わって」

「はい。ほいシャラン」

「おう。で、なんの用ですか東さん」

「アレのデータとかはできた？」

「いいえ。まだですけど」

「そう。出来たらまたすぐにラボに帰ってきてもらおうよ。」

「あとは最終調整をあわせてざっと3、4週間ですかね？」

「そう。ばいびーミ」ブツ ツーツ

「それだけ・・・でもないか。のために電話してきたのかあの人」

「あ！もう時間だから帰るね？」

「俺も帰るよ」

「じゃあ、送っていつてあげるよ。」

今度はイチカカナデの家に行かせてもらおうよ

「おう。じゃあなシャラン」

「またね。シャラン君」

「じゃあね2人とも」

これから約3（？）週間で帰らなきゃいけないけどね・・・。

5話（後書き）

そろそろストーリーは急加速を始めます！

「マジで？」

甘いよシャラン君。マジだ。

さて、携帯の着信音は突っ込まないでくれるとうれしいな。

感想まっってます！

あと、今回は暴露とかも無し！

ていうわけで、

感想とか書いていただけると嬉しいです。

「また次回みてくれよ！」

6話（前書き）

今日も更新しました。

今回は主人公の一日です。

・・・けっこう生活のバランスがひどいな主人公・・・。

あとデユオ様感想ありがとうございました。

では、本編どぞ！

6話

一夏達が家に着てから2週間たったとある休日~~~~~

ボクは一夏たちと外に出ていた。

ダンも来ていてゲームセンターに行くそうだ。

6話/休日

「ん」

「どうしたんだ？」

「やあ一夏ちよつと寝不足でね。
眠いんだよ」

「そうか。無理するなよ？」

「ありがとう。わかってるよ一夏」

寝不足の理由は機体本体の最終確認をしていたからである。
徹夜して仕上げたおかげでほとんど完成したが後は東さんにまかせ
ることにした。

あの人ならなんとかしてくれるでしょ。

でもって、もう多分フレームとかも組み立て始めてると思う。

「よし！今日こそは負けねえからな一夏！

あと他人ごとみたいにしてるけどお前もだからなシャランー！」

「はっ！俺だって負けねえぜ！」

「はははははははは」

まあ、今はこの平凡を楽しもう。

~~~~~

「負けた・・・また負けた・・・」

「ははは元氣出してよダン」

「そうだぜ。いつまでもくよくよすんなよ」

今は五反田食堂にいる。

ダンは結局アレから一夏どころかボクにすら負けていた。  
一夏に3連敗、ボクに5連敗である。

なにでつて、エアホッケーだけど。

「お前ら食わねえなら下げろぞ！」

この人は五反田 巖さん。

少し怖いけどとてもいい人なんだ。

「いただきます」とボク

「た、食べます食べます」と一夏

「いただきます・・・」とダン

「おう食え」と巖さん

ボク

「!!!?」

おいしい！くせになりそうだね。

この野菜炒めは絶品といえるような味だ。

・・・また今度ここに来ようかな。

~~~~~

それからお昼をおいしく頂いてボクは帰らせてもらった。

今はパソコンに向かって武器データの作成に勤しんでいる。

「（ビット兵器に扱いが得意なライフル、あとはアーミーナイフとかでいいかな？）」

次々とキーボードを打ち込んでいき、データを作成していく。

カタカタカタカタカタカタカタカタカタカタ
カチツカチツカチツカチツカチツカチツ

部屋は静かでしたが、キーボードを打つ音と、時計の針が動く音だけが鳴っていた。

「深夜2時パソコンでデータを作るのを終えたボクは布団に入り眠りに付いた。」

コレがボクの日である。

毎日朝4時に起きて、深夜1、2時に寝る。

・・・こんなんで大丈夫なんだろうか・・・？

まあ、専用機が出来たら睡眠時間も元に戻るだろう。
じゃあ、おやすみ。

6 話（後書き）

暴露コーナーは疲れたのでお休み。

感想など有りましたら書いてくれると嬉しいです。

ではまた次回、見てください。

7話（前書き）

7話更新でせう！

見てください！

7話

今日・・・ついにこの日が来た。

転校（この場合は転入か）してから1ヶ月、ついにデータが完成した。

今、東さんのところに送っている所だが、これが終わったら此処を離れなければいけない。

「（長かったようで短い1ヶ月だったな・・・）」

この1ヶ月は本当に濃い1ヶ月だった。

7話／引越しという名の失踪前日

初日 東さんに学校に行かされる↑ここ誤字にあらす

2日目 一夏、ダンと友達になる

一夏、緋河さんを家に招待する

3日目 一夏達から鈴？さんの話を聞く

曰く、とても暴力的で活発的だ、とのこと

4日目 初の休日。ハードウェア外面のデータ作成に勤しむ

5日目 午前中は前日と同じくデータ作成。

午後は一夏の紹介で織斑千冬さんと知り合う

6日目 普通の学校生活・・・のはずが呼び出され襲われる。

ただし普通に振り返ちにあわせたが

7日目 転入してきてからちょうど1週間たった。

この日はダンに誘われ家に行った

8日目 ハードウェア外面のデータ完成。

ソフトウェア引き続き内面のデータ作成開始

9日目 休日。今日は食材や茶葉などの買出しに行った
10日目 今日は特に何も無かった。

というか、今日だけではないか、何も無い日は
ソフトウェア

11日目 内側の完成

最終確認に入る

12日目 束さんが家に来た。

・・・どうやって入ったんだ？

13日目 家に帰ったらまた束さんがいた。

・・・今度は念入りに鍵も閉めたのに・・・

14日目 転入してから2週間。

改めて振り返ってみたが、無茶苦茶だな

15日目 今日は入ろうとした瞬間中から束さんと千冬さんの声が
聞こえた。

今回はアンタもですか！！？

16日目 最終確認終了。・・・束さんに送るか・・・

17日目 帰る途中で絡まれていた女の子を助けた。五反田 蘭と
いうらしい。

どつかで聞いたことがある気がするけど気のせいだろ

18日目 衝撃の事実、ランはダンの妹だった！！

・・・全然似てないな・・・

19日目 またしても家に入ろうとしたとき、中から束さんと千冬
さんの声が聞こえた。

・・・一夏に相談しようかな・・・

20日目 またまた今日も食料の買出しに向かった。

その先で一夏と会った。

21日目 転入から3週間。下駄箱を空けたら中から大量の手紙が
出てきた。

・・・どうやってこんなに入れたんだ？

22日目 今日はテストだった。ボクには簡単だったが一夏達には
難しかったらしい。

23日目 今日は一夏に誘われて遊びに出かけた。

ゲームセンターなんて初めてだったけど楽しかったな

24日目 武器データ作成開始

機体の外面は完成したらしい（束さん談）

25日目 学校サボってデータ作成に勤しむ（24時間）

26日目 上に同じ

27日目 上に同じ

28日目 上に同じ

29日目 上に同じ

30日目 ようやく武器データも完成 ↑今此処

「今思ったら最後の最後5日も学校サボってるし、まあ、データ送ったらあの人の所戻らなきゃだからな」

まあ、いいか。

「データも送り終えたから、転校の連絡をしなきゃな。」

ブルルルル、ガチャ

「もしもしクインですが……………」

……………というわけなので明日引っ越すことになったんです」

「わかった。元気でなクイン」

「はい。先生もお元気で」

ガチャ、ツーツーツ

「さて、連絡も終わつたし、片付けるか」

一夏たちに連絡して無いけどいいか。

「（じゃあね、皆）」

此処にいるのもあと1日。

今日が此処で暮らす最後の日である。

「ほんと、いろいろあつたな」

でも、それも今日で終わりである。

「もう寝るか」

だから、おやすみ皆。いい夢見てね？

7 話（後書き）

疲れた。

感想など有りましたら書いてくださると嬉しいです。

では次回も見てくださいね？

8話（前書き）

今回は前回の一夏バージョンです。

ちなみに結構短めですがどうぞ！

8話

シャランの奴、結局此处5日間学校に来なかったな……。

8話／引越しという名の失踪前日SIDE一夏

よう、織斑一夏だ。

今俺は学校の教室にいるんだが、隣の席の奴が5日前からいない。先生に聞いたが怪我や病気にかかったわけではないらしい。

ちなみに、隣の奴の名前はシャランって言うんだが、初めて見た感想はまあ、なんだ真面目そうだなあっていうことだった。

まあ、実際は結構いい加減だったんだが。

それはともかく

閑話休題

そのシャランがいない所為で一部の女子が凄かった。というか、シャランってすげえモテるんだな。

まあ、シャランが鈍感だから意味がないんだけどな。

ちなみに五反田にこのことを言ったら

「お前にはかなわねえよ」と言われてしまった。

俺は鈍感じゃないっての。

それで緋河さん（だっけか）が一番ひどかったな。

緋河さんはシャランのことがすごい気になってるみたいだったからな。

授業中も上の空だったし。

思えばあいつは俺らに多大な影響を与えていったな・・・

あいつがいなくてこんなにつまらなくなるとは思わなかった。

考えれば考えるほどおかしいやつだったな。

束さんとは知り合いだし、あの人が認識してるし、
千冬姉だって認めている。

・・・あいつは何者なんだ？

「（はあ・・・元気にしてっかな・・・）」

とりあえずは今日も一日をしっかりとがんばりますか。

だからお前もがんばれよシャラン？

8 話（後書き）

やあ作者だ。

今回はひとつだけ重要であって重要ではないことをいう。

それは・・・

ダララララララララララララララ・・・ダン！

もう一人転生者が出てきます。

ちなみに男で最強最低系です。

ではまた次回みてくださいね？
感想待ってます。

9 話（前書き）

9 話です。

今回は前回言った転生者が登場します。

超テンプレな転生者です。

ちなみに与太話はここまでで、

次回からはついに原作に突入です。

では、本編どぞ。

9話

よう。織斑一夏だ。

結局、あれから1年経ち俺は受験シーズン真っ盛りのなか勉強している。

実はな中学卒業してすぐに就職したかったんだが千冬姉の圧力（主に腕力）には勝てずにこのさまだ。

そういえば1年前シャランが5日間も学校を休んでいたのは引越しの準備に時間がかかったらしく、休まざるをえなかったかららしい。

そつえばあいつはどうするんだろう・・・？

9話／＼1年たちました／

／＼／＼一方そのころシャランは／＼／＼／＼／

どうも、シャランです。

ついに受験シーズンに入りました。

おそらく一夏は千冬さんの力に勝てずに勉強中だろう。

俺は何をしているかという・・・

「最終調整完了つと」

機体の最終点検である。

実は完成してすぐに一回出撃しているんだが、そのことは割愛しよ

う。

—— 読者の皆様のご要望が多ければ書きます（by作者）

何はともあれボクは受験をしなくてもいいのである！

・・・まあ、強制的に学校に入らなきゃいけないんだろうけど。
めんどくさい・・・。

くシャランSIDE OUTく

くくく？SIDEくくくく

よう。俺様はこの小説のオリ主様だ！！

—— 注 違います（by作者）

おつと自己紹介を忘れていたな。

俺様の名前はオルカレイ・箕徒^{みただ}だ。

どうだ！格好いいだろう。

俺は！じきに一夏ハーレムを俺ハーレムに塗り替える男だぜ！

簡単に言つと「みんな俺の嫁」ってやつだぜ！

箒は強い奴になびきそうだし、

鈴はアンノウンの時に一緒に戦つて強さを見せればいいし、

セシリアは代表決定戦のときに勝てばいいし、

シャルロットは同情かければ一発だろ、

ラウラは織斑千冬より強ければ俺にゾクコンになること間違いなしだぜ！

ふふふ、一夏よ、君の時代はもうすぐ終わる。
今のうちに楽しんでおくことだな！！

・・・そっくいや神がもう一人転生者がいるとか言ってたな。
ふん、そんな奴俺の敵ではない！

待っているよIS学園！！

～オルカレイ・箕徒SIDE　END～

～シャランSIDE～

ふああ、眠い。

「（今日はここまでにするか）」

ゾクッ

「（うおう！寒気が、早く寝るか）」

9 話（後書き）

やあやあ作者だ。

久しぶりである皆様。

「いきなり変な登場の仕方だな」

気にしたら負けだぞっ ♪

「何に負けるんだよ・・・」

今回の設定は・・・

「設定は・・・」ゴク

今回出てきた転生者は最初は改心して、主人公たちと仲良くさせるつもりでした。

「つもり？」

そう、つもりだった。

しかし、読者からぼこぼこにしてくれときたから、

「きたから・・・？」

あるタイミングで殺しちゃうことにしました ♪

「そついうの普通に言っていないのかよ・・・orz」

今回は此処まで！

今回も見てくれてありがとうございました。

「誤字・脱字、意見なんかあったらドンドン書いてくれ
感想も待ってます。」

「じゃあ次回も見てくれよ」

はいばい ノシ

10話（前書き）

今回は一夏中心の話です。

どうぞ。

10話

一夏SIDE IN

「(はつきり言おう。これは・・・かなりキツイ・・・・・・・・)」

よう織斑一夏だ。

なぜこんなことになってるかというところ・・・

「はあ・・・」

俺ともう一人以外全員女子だからだ。

・・・なぜって？

そりゃあ、なぜかしらねえけど――

男でISを動かしたかったからだチキショウ！

10話ノクラスメイトは一部を除き女子だけらしい

「・・・・・・・・くん、」

「はあ・・・・・・・・」

「織斑君、織斑一夏くんっ！」

「は、はははい！」

うわあ声裏返っちゃった。

超恥ずかしい・・・。

「『あ』から始まって今『お』の織斑くんの番なんですけど、自己紹介してくれるかな？だ、だめかな？」

本当にこの人は年上なんだろうか・・・。

同年代といわれたら受け入れてしまいそうな気がする。

「あのそんなに謝られても・・・。てか自己紹介するので」

「ほ、本当？本当ですか？本当ですね？約束ですよ？絶対ですよ！」

「（はあ・・・。）」

覚悟を決めて後ろを向く。

うつ。自意識過剰じゃなくてクラスのほとんどから死線（誤字にあらず）を感じる。

「あゝつ。織斑一夏です。よろしくお願いします」

それだけ？的な視線を送るな。

「以上です！」

ガタッ！！

そこ。何を期待しているんだ。

バシン！

「いつ」

これは・・・！！

おそろおそろ振り返る

「げえ、セイバー！」

「誰がハラペコ騎士王か！」

バシン！

「ぬっおおっ……!!」

これは……かなり痛い……。

バアン!!「すいません。おく」バシーン!!

これは痛い……。

「うああああああ」

「馬鹿者が遅刻なんぞ言語道断だ。とつとと自己紹介しろ」

その入ってきた奴は、真紅の髪をストレートにしてる男だった……

——
つて男!!

シャランSIDE

まさか遅れて入ってすぐにたたかれるとは思わなかった。

原作では知ってたがこんなにも痛いとは……。

そっいえば男子がもう一人いるな。

こいつが神の言ってた転生者か。

「クイン 秦 シャラン 刹狼だ。」

趣味は特にないが家事は全般的にできる自信がある。

一年間よろしく頼むぞ」

10話（後書き）

遅れて申し訳ありません。

感想などありましたら書いてくれるとうれしいです。

では、また次回見てくれるとうれしいです。

11話（前書き）

更新だぜ（笑）

今回は前回の続きから。

シャ「いくよ!」

11話

「^{クイン}秦 ^{シャラン}刹狼だ。

趣味は特にないが家事は全般的にできる自信がある。
一年間よろしく頼むぞ」

11話／再会・・・なのか？

「は・・・？」

「え・・・？」

「ん？」

『きや~~~~~!!!!!!』

「んあ!!!？」

「嘘、男!？」

「もう一人いたの!？」

「あゝんん!! 諸君、私が担任の織斑千冬だ。君達新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ないものには出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五歳を十六歳までに鍛えぬくことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

思うにこの人のこの台詞は教師が言っているものなんだろうか？
というかこれ、ただの脅迫なんじゃないか・・・？

「キヤーー! 千冬様、本物の千冬様よ!」

「ずっとファンでした!」

「私、お姉様にあがれてこの学園に来たんです！ 北九州から！」

別に南北海道でもいいと思うんだけど・・・まあどうでもいいけど。

「あの千冬様にご指導いただけるなんて、嬉しいです！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

そこ、命は大切にしような。

「…毎年、よくもこれだけの馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？ 私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

なんというか・・・ご苦労様です。

でももうちょっと優しくしたほうがいいのではないか？

「きゃああああっ！ お姉様！ もっと叱って！ 罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躡をしてく！」

クラスのみんなが元気で何よりですね。

「で？ 満足に挨拶もできんのか、お前は」

はいキマシター辛辣な言葉ー。

「いや、千冬姉俺は——」

パァンッ！

「織斑先生と呼べ」

はい、3発目。一夏の脳細胞は1万5千個死滅！。

「……はい、織斑先生」

一夏・・・なんて不憫な子！！

「え……？ 織斑くんって、あの千冬様の弟……？」

「それじゃあ世界で二人だけISを使えるって言うのも何か関係が？」

「ああっ、いいなあっ。代わってほしいなあっ」

今ので気づかれたっぽいね。

あと二人目、ボクを忘れていないかい？

「これでSHRは終了だ。諸君らにはこれからISの基本動作を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染みこませる。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

『はいっ！ー！』

すごいな。この団結力。

~~~~~

「一夏、久しぶりだな」

「シャラン！お前今まで何処行ってたんだよ」

「うん。無理やりどっかに連れて行かれてた。・・・あの人に・・・」

「ああ・・・そういうことか・・・」

「ああ。そういうことだ」

「何はともあれまたよろしく頼むぜシャラン！」

「ああ！一夏！」

一時間目が終わってすぐの会話。

やはり知り合いとの会話はこの空間では必要性大だ。

「ところで一夏。お前は授業についていけてるのか？」

ギクツという音が聞こえた気がした。

「い、いやあそれがな・・・全然わからん」

「はあ・・・」

「ということで教えてくれないか？頼むっ！」

「まあ、仕方がないな・・・いいだろう」

「ありがとなシャラン！！」

「わからないところをボクに聞いてくるのは前と変わらん」

「そうだな」

「・・・ちよつといいか？」

「ん？ああ・・・一夏、お前さんをお呼びだ」

「え？まさか筈？」

「まあ、ごゆつくりな。一夏、ボクのことは気にしないでいいぞ」

「？そうか、じゃあ行ってくる」

そういつて二人はどこかへ行った。

「ねえねえクイン君は織斑君と知り合いなの？」

「ん？ああ。中学校時代少しだけ同じ学校で過ごしていた」  
「そう。ありがとね」

そういつて彼女はグループの中に戻っていった。

「（はあ．．．．．これからどうするか．．．．．）」

少しだけこの先が心配になってきたボクだった．．．．．。

## 11話（後書き）

次回は転生者（と書いて変態と読む）の視点がはいるかも？

「あいつから全然強さが感じられないんだが……」

それは最強（笑）のアイツをこえた強さを持つてるからだろ。

ちなみに次回はオルコットさんも出ます。

「じゃあ次回見てくれよ？」

乾燥なども待ってまゝす♪

## 12話（前書き）

更新。

今回はセシリアのターン！

けど少しオルコツ党の人は見るのをやめたほづがいいかも知れませんが。

なぜなら主人公がぼろくそ言うから！

では本編どぞ！

## 12話

休み時間さっそくボクは一夏にESについて教えていた。

なんでって？そりゃあ一夏が自慢げに全部わかりませんなんていうから早速教えなければいけなくなっただけだ。

「なあ、ここはどうなるんだ？」

「ああ、パッシブ・イナーシャル・キャンセラーは・・・」

「ちよつとよろしくて」

12話／金髪のアイツはセシリア・オルコット

「へ？」

「・・・誰だ」

「まあなんですの！その気の抜けたお返事は！この私に話しかけてもらっただけでも光栄なことですよ！その自覚はありまして？」

「誰だ・・・と聞いている」

「私を知らない？セシリア・オルコットを？入学主席でイギリス代表候補生の私を？！」

「知ったこつちゃないし、代表候補生程度が喚くな。貴様程度簡単に倒せる」

「言ってくれますわね・・・」

「本当のことを言って何が悪い。ボクの知っている限りではドイツ代表候補生は君の何万倍も強い」

「ふざけていますの？」

「違うね。本当のことさ」

「なあ」

「なんですの？」

「ひとつ質問していいか？」

「下々の者の質問に答えるのも貴族の務め。よろしくてよ」

「……代表候補生ってなに？」

ガタタツ！

「一夏。それくらいは知つとけ。

代表候補生ってのはわかりやすく言うとそこらへんの凡人より苦  
労したエリートだ」

「へえ、凄いな」

「……馬鹿にしていますの……」

「そんなわけないだろ」

「大体、あなたISについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。男でISを操縦できると聞いていましたから、少  
しくらい知的さを感じさせられるかと思っていましたけど、期待は  
ずれですわねあなた方もさつき話しかけてきた方も」

「俺に何か期待されても困るんだが」

「（ボクは結構詳しいところまで知ってるけどね）」

「ISの事でわからない事があれば、まあ…泣いて頼まれたら教えてもよくなってよ。なんせ私、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

「？入試ってあれか？ISに乗って戦うやつ」

「それ以外に何がありますの？」

「それなら俺も倒したぞ教官」

「ふふつ。その程度ボクも倒したさ」

「は…？ わ、私だけと聞きましたが？」

「女子だけってオチじゃないか？」

「悲しい思い違いだね」

「つ、つまり、私だけではないと…？」

「いや、知らないけど」

「そうなんじゃない？」

「じゃ、じゃああなた方も教官を倒したって言いますの…？」

「ああ」

「う…たぶん」

「たぶん！？たぶんってどついう意味かしら？！」

キンコーンカーンコーン

「っ！話の続きはまた後で。よろしくて！」

「（いや、よくないんだが…）」

というか・・・これからが大変そうだ・・・はあ・・・。

シャランSIDE OUT

オルカレイ・箕徒SIDE

よう、転生オリ主様の俺オルカレイだ！

注）何度も言うが違う。

今日はなんかいけすかねえ原作に出てこない男が来やがった。

なんかイケメンっぽいけど銀髪オッドアイの俺様にはかなわないぜ！

しかも一夏と仲良くなつてフラグを搔つ攫おうという作戦のはずが・

・・・あいつが一夏の知り合いだと！

おかげで話しかけづらくなったじゃねえか！

まあいい。きょうはあのセシリア・オルコットに話しかけてきた。

まだまだツンツンしてるけれど直ぐにデレさせてやるぜ！

オルカレイ・・・なんだっけ？SIDE OUT

## 12話（後書き）

「今回は作者不在のため急遽ボクがやることになった。  
あと、ラウラ・ボーデヴィッヒさんには申し訳ない。  
なんでって？

そりゃあの変態と印象が同じなんだぞ？  
というわけで今回は変態のスペックデータだ」

オルカレイ・箕徒

年齢：15（中身は30）

髪：銀色  
ラウラほどきれいではない

瞳：赤と青

身長：189

体重：知るか！

細かい設定：  
変態な転生者。

ハーレムを目指すが無理！

「ひどいなこれは。」

あと、追加で一人転生者・・・こっちはおきたら何故か転生してたパターンの奴

（ちなみに最低系ではない）を出すかもしれん。

その場合は、オルカレイ？の死亡が早まるらしい。

これは読者の意見によって決まるぞ」

「では、今回も見てくれてありがとな。

感想も意見も待ってるぞ。

では次回も見てください。

またな！」

### 13話（前書き）

今回は変態の名があるのに空気と化しているという・・・ザマァWWW

デユオ様感想ありがとうございます。

では、本編どうぞ！

## 13話

「それではこの時間は実戦で使用する各種装備の特性について説明する——ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

あ、一夏頭の上に？が3つほどある。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦では、入学時点での各クラスの実力推移うい測るものだ。今の時点でたいした差は無いが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間の変更が無いからそのつもりで」

めんどくさそうだなー。

13話ノクラス代表ですか……

「はい！ 織斑くんを推薦します！」

「私もそれが良いと思います！」

「私は箕徒君を推薦します！」「私も！」

「私はクイン君を推薦します！」「あ、それもいいわね。はい！」

私もクイン君くんを推薦します！」

ふーん、クインってやつほかにもいるんだ。

まあ、ボク以外なら誰でもいいや。

「では候補者は織斑一夏と秦 刹狼、オルカレイ・箕徒……ほ

かにはいないか？自薦他薦は問わないぞ」

へー、クイン・シャランってほかにも・・・てえ、

「お、俺え！！？／＼ぼ、ボクう！！？」

させるか！

「ボクは一夏を推薦します！」

「な、テメエ！じゃあ、俺はシャランを・・・てか俺はそんなのやらな・・・」

「自薦他薦は問わないと言った。他薦されたものに拒否権は無い。選ばれた以上は覚悟をしろ」

バンツ！！

「納得がいきませんわ！」

来たか・・・セシリア・オルコット・・・！！

「そのような選出は認められません！ 大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！ わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

なめているのかコイツは・・・！！

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！ わたくしはこのような島国までISの修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

さっき言ったはずなんだけどな・・・ボクの方が強いって。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなければいけないこと自体、わたくしにとつては耐えがたい苦痛で——」

ブチッ

「おいおい、お前知ってるか？イギリスは日本より文化が劣ってるんだぜ？

・・・それに世界はイギリス中心じゃねえんだよ。世界はすべて平等だ」

「それにイギリスだってたいしたお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

「なっ……！？」

「それに・・・」

——君程度なら簡単に倒せるってさっき言ったはずだけど？」

「あつ、あつ、あなたねえ！ わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

「はあっ…先に俺の祖国を侮辱したのお前だろ」

「君は日本のすごさをわかっていない。ISだって日本人が開発したものだ」

「っ——決闘ですわ！」

「おう。いいぜ、四の五の言うよりわかりやすい」

「いいでしょう。そのプライド、木っ端微塵にしてあげます」

「言っておきますけど、わざと負けたりしたら私の小間使い——い

え、奴隷にしますわよ」

「侮るなよ。真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない」

「手を抜くのは油断してる証、君程度の相手にだろうと全力でいく」

「そう？ 何にせよちようどいいですわ。イギリスの代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットの实力を示すまたとない機会ですわね！」

雑魚はよく吼えるとはよくいったものだ。

「んじゃ、ハンデはどのくらい付けるか？」

「あら、早速お願いかしら？」

「いや、一夏がどれくらいハンデをつければいいかってことだと思っ  
うよ？」

クラスから、ドッと爆笑が起こった。

「く、織斑くん、それ本気で言ってるの？」

「男が女より強かったのって、大昔の話だよ？」

「確かにISを使えるかも知れないけど、それは言いすぎよ」

ダンッ！！

「君たちは本気で言ってるのかい？一夏は君たちと比べようもない  
ほど強い。」

さらに！ボク達はISを使えている。君達と立場は同等だ！」

ボクがそういうと、理解したのか笑いは収まる。

確かに今は女の方が強い。それはISが既存の兵器を上回る圧倒的

な戦闘能力を有しているから。  
でもそれは男がESに乗れないからであって、乗れるのなら対等と  
いうこと…簡単だ。

「でもオルコットさんは代表候補生だよ？」

「さっき言ったよね。ボクなら簡単に倒せるって。彼女程度なら簡単に落とせる」

「で、でも・・・」

「でもはもういい。仕方がない、お互いにハンデは無しだ。それで  
良いよな？　一夏も」

「ああ」

「わたくしもそれで構いませんわ！」

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課  
後、第三アリーナで行う。織斑とクイン、箕徒とオルコットは各自  
準備をしておくように。それでは授業を始める」

さあて、今から戦いが楽しみだ・・・。

### 13話（後書き）

あとがき

シャ「代表決定戦か・・・メンドイな」  
奏「シャラン君なら勝てるよ!」

今回も奏が出ていませんでした。

・・・しかし!次回は・・・。

お楽しみに!

奏「今回も見てくださいがとう」

シャ「感想、意見もドシドシ送ってください」

次回もまた見てね?

アデュー ノシ

## 14話（前書き）

シャ「なんか今回しまらねえな」

そっちな。俺も気にしてるんだ。

シャ「そっちなや次回は思いっきり時間が飛ぶんだよな」

そこ！ネタばれしない！

ではグダグダですが本編どうぞ！

## 14話

「あゝ」

昼休み・・・一夏はグロッキーになっていた。

14話/昼・・・そのとき歴史は動いた・・・!!——「そんなわけあるか！」

「なんであんなこと言っちゃまったんだろ・・・」

「気にしないほうがいいとボクは断言するよ」

「でもなー。シャランお前なんか作戦あるのか？」

「ないよ」

「へーやっぱりあー・・・ってないのかよ!!」

うむ。見事な乗り突込みだ。

「それよりも飯食いに行こうぜ」

「おう。ちよつと待ってくれ。紹介したい奴が居るんだ」

「そうか・・・」

そういつて一夏は篠ノ之(?)の席に行つてなにやら話し始めた・・・が、

「あぶねえ!!」

危機一髪。一夏が投げ飛ばされて床に落ちそうになったとき、ボクはギリギリでキャッチした・・・が

『きゃ~~~~!!』

「ん？」

ん？なんだ？・・・あ。

ボク、一夏を今、お姫様抱っこという奴で助けてしまっ、今もそのままだった。

「悪い一夏、今おろすぞ」

「ああ。助けてくれてありがとな」

「友達を助けるのに理由は必要ないぞ」

「そうか・・・それでも、ありがとな！」

「まあいい。とつとと飯行くぞ」

「ああ。箒、とつとと行くぞ」

「おい、ちょ、待て！」

「待つわけないだろ」

そんなわけで今は食堂に居る。

「なあ箒頼む。俺にISについて教えてくれないか」

「む・・・なんで私なのだ。断る」

「そう言わずにな、頼むよ箒」

「私ではなくシャランに頼めばよいだろう。それに自業自得だ」

ん？なんで名前で呼ばれてるかつて？

さっきあの人に苦勞させられてることを知った彼女から仲良くしようといってきたからだ。

束さん・・・どんだけ周りの人に迷惑かけてんの・・・織斑先生にも同じ感じのと言われたぞ。

「いや。ボクは一人で調整しなきゃいけないから参加できないよ」

「む。ああ、そういえばそうだったな」

ちなみに箒だけにはすべて伝えてあるのでこうなる。

「？なんでだ？」

一夏・・・は、まあ仕方ないか・・・。

「・・・俺は専用機持つてるんだっての」

「マジかよ・・・」

「マジだ」

「orz」

「つーことで箒は一夏と『ふたりきり』で特訓してる」

「ああ。仕方ないな。特別に私が『ふたりきり』で鍛えてやろう！」

「ん？ああいいのか箒？」

「ああ。だから放課後、剣道場に来い。腕がなまってないか見てやる」

「箒、俺は・・・見てやる・・・わかったよ」

これで決定か。

「じゃあ、これで決定か。一夏、これから夜とかもお邪魔してISについて叩き込んでやる」

「私は剣道で鍛えるのか？」

「ああ。こいつたぶん中学3年間帰宅部だろうからな」

「・・・なぜばれた・・・」

「よし！では一夏！これからは放課後毎日3時間特訓だ！」

「でm・・・一夏に反論は許されないよ・・・はい・・・。」

「じゃ、早く教室に戻ろうぜ。次は織斑先生の授業だぞ」

「げ・・・千冬姉かよ。急がなきゃな」

これで特訓内容は決まった。

覺悟しろよ一夏……ふふふ、はははははげほっげほっむ、む  
 せたゝ（泣）

## 14話（後書き）

今回は話し合いといふかなんといふかは、なしです。

次回もまた見てください。

感想お待ちしてます。

## 15話（前書き）

今回は次の日、朝のお話です。

この後2、3話ほどやってからVSセシリア戦です。

では、どうぞ！

## 15話

次の日、一夏たちとご飯を取ろうと思い、誘ってみたんだが・・・

「お前ら、昨日何があつた・・・」

「「な、なにもないぞー!!」」

なにさそのあからさまな何かありました的な答え方は・・・

「ごまかせてないからな。・・・さあ一夏。きりきりと吐いてもらおうか」

「は、はいいい・・・」

## 15話／翌日

「1025、1025・・・ここか」

ガチャ

「おお!!」

ベッドがもふもふだ!

これはかなり高いと見た!

「ん?」

別な荷物があるが多分シャランのだろうと思い、ベットに座ってくつろいでいた・・・が

「誰か居るのか？」

ん？なんかやばいぞ…………。

「こんな姿ですまないな。私は篠ノ之……」

「……箒」

「へ？い、い、いー夏？」

「おおおう」

「っ／＼見るな！」

「悪い！」

「どうしてここにいる……？」

「どうしてって、俺もこの部屋なんだが……」

そっからが早かった。箒は、すぐさまベット脇に置いて在った竹刀を取り……

「チエストーリー……！！」

バシーーン！！

~~~~~

「……という訳なんだが」

「……それは一夏が悪い」

「……なんでだよ……」

「……そういうのは全部男が悪いんだよ」

「……そうか」

「……そうだ……」

かなり気まずい雰囲気になってしまった。

「とりあえず一夏、謝れ。まずはそこからだ」

「ああ。・・・箒、昨日は悪かった。許してくれとは言わないが・
・その代わり今度駅前のパフェ奢るからさ」

「！！？ま、まあ仕方ないな。一夏がそこまで言うなら許してやろう」

「シャランも行くか？」

「いや、ボクはいいよ。箒と二人きりで行ってらっしゃい」

「？わかった」

「（二人つきりだと！！つ、つまりはデートになるんだろうか・・・・／＼）」

「じゃあ箒、今日日にち教えるから」

「う、うむわかった。（しかし、相手は一一夏《唐変木・オブ・唐変木ズ》だ。ここでなんとかしないと・・・）」

まあ、これで何とかなったのかな？

ちなみに、ボクの部屋は一人部屋で、元倉庫を大改造して部屋にしたらしい。

シャワーもトイレもキッチンもついていたのには驚いた。

ちゃんと今まで使っていたコーヒーマイカーなども入っていたのでこれからは大丈夫だろう。

「（なにはともあれ、今日も平和だな・・・）」

15話（後書き）

奏「・・・・・・・・」

ダラダラ

シャ「・・・・・・・・（ダラダラ）」

奏「サクシャサン」

は、はいい！！

奏「前々回二言ツタコト覚エテマスカ？」

ダラダラダラダラ

奏「チョットアタマヒヤソウカ」

ひい！！

ドガーーーーーン！！

奏「ふう・・・・・・・・どうかした？シャラン君」

シャ「い、いやなにも・・・・・・・・（これからは奏を怒らせないようにしよう・・・・・・・・）」

奏「？そう」

シャ「えゝ作者が居ないので今日はここまでです」

奏「今回も見てくれてありがとう」

シャ「次回も見えてくれるとうれしいぞ」
ちなみに感想はいつでも待ってます！
シャ「うおう！！いつの間に居た！？」
そんなことはどうでもいい。

じゃ、また次回！！バイバイ ノシ

16話（前書き）

いざ・・・更・新！！

今回は初・主人公の機体が出てきます。

ちゃんと奏ちゃんもでてますよ？

あと、デユオ様感想ありがとうございます。
精一杯がんばります。

では本編どうぞ！

16話

よう、シャランだ。

今は放課後なんだが放課後なんだが・・・

今、俺女子の大群から逃げながら2日前に許可を取ったアリーナに向かつて走っていた。

16話／逃走と訓練と再会と

「ふえゝゝゝ！とりあえずはやくアリーナに行かないと」

ドンッ・・・！

「いてて・・・ん？大丈夫か？」

「はいなんとか・・・ってシャラン君！？」

「ん？緋河さん？」

「今まで何処行ってたんですか！てか何で居るんですか！？」

「悪い、また今度。じゃ！」

俺はまた走り出した。

アリーナの更衣室の入り口までもう少しだ。

プシュッ

「あぶねえゝ。このままだったら秘密で6時まで借りられるっての

に2時間半しか出来ないところだった」

そういつてボクはISスーツに着替え始める。

「よし！着替え完了！早速やるか」

ボクはアリーナの中心に立ちISを起動させる。

（荒れ狂え デザートストーム！！）

頭の中で砂漠の大嵐を思い浮かべる。

ボクの体に纏われたそれは、まるで騎士のようだった。

肩にはDesrtstormと書いたロゴがついている。

両肩には非固定武装が1対あり、それぞれ4基の四角く、薄いフィンパーツがついていた。
アンロックユニット

腰には独特なバインダーがついており、それぞれ5期ずつのどがった牙のようなものが収まっていた。

これがボクの機体、砂漠の嵐DesrtStormである。

「この機体を使うからには負けられないからね」

そう言い、ボクは右手にビームライフル——45口径ビームライフル『Hellstorm《地獄の嵐》』と一致——を呼び出した。
コール

「まずは…………狙い打つ！」

目の前に現れた動き回る大量的…………軽く50は超えているだろう…………を最小限の動きだけで正確に打ち抜いていく。

ヒュン、パン、ヒュン、パン、ヒュン、パン…………以下エンドレス

「ラスト！狙い打つぜええ！！」

ヒュン、パン！

「ミッションコンプリート…………よかった。腕鈍ってなくて」

次はヘルストームを収納して、^{クロス}二丁のビームピストル——^ニTwi
^{対の風}n Windと一致——を呼び出した。

「今度は乱れ打つぜ！」

周りに現れた200以上の動き回る的に今度は二つの銃から放たれる無数の弾幕が襲い掛かる。

パパパパパパパパパパパパパン！

「さあ、今度は…………行けよファング！！」

彼の腰から6基の牙が出され、残りの的をどんどん食い尽くしていく。

パパパパパパパパパパパパパパパパパパン！

「ほづら終わりだ！！」

最後の一個を打ち終えたときにはもう少しで6時を迎えそうな時間になっていた。

「（そろそろ帰るか・・・）」

そう思い、ISを解除、更衣室に向かった。

「（緋河さんね・・・なつかしいな。彼女もこの学園の生徒だったのか・・・）」

プシュ

「お帰り。ずいぶん長くやってたんだねシャラン君」

「緋河さん」

「奏、か・な・でだよ？」

「ひ「名前で呼んで！」・・・奏」

「ん？なに？」

「何で此処にいるの？」

「こっちの台詞よ！何でこの学園にいるの？てかなんでISうごかせてるの？」

「此処にいる理由はISを動かせるからでなんで動かせるかはこっちが聞きたいね！？」

「今まで何処に行ってたの？」

「んゝいろいろ？」

「なんで疑問系！？」

「疲れたからかえるねゝ」

あ、部屋の番号教えとかないと。

「1555番」

「・・・え？」

「ボクの部屋だから。ほかの人には言わないでね」
「うん！」

彼女の顔がいきなりパアッと明るくなった。

うっ可愛いな・・・。

「じゃ、また明日」

「うん！また明日ね！」

ふう・・・今日のところは帰るか・・・。

「（あ、でも一夏に勉強教えてあげなきゃ・・・）」

ま、なんとかなるでしょ。

16話（後書き）

今回はシャラン君が奏ちゃんに見惚れました。

奏「／／／／」

シャ「／／／／」

おや？あそこでいい雰囲気をかもし出しているぞ？

というかゲストがトリップしてるから何も出来ないんでここまで！

今回も見えてくれてありがとうございます。

誤字・脱字などありましたら教えてくださると助かります。

次回もまた見てください。

感想もお待ちしてます！！

では！ ノシ

17話（前書き）

今回は変態を軽くボコります。

しかし、戦闘描写が苦手なため今回は減らしました。
すいません。

では、本編どうぞ！

17話

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

あれから数日経ち、決戦当日。

ボクらのコンディションは最悪だった。

何故か？それは・・・一夏の専用機がまだ届いていないからだ。

17話／クラス代表決定戦 前編

「埒が明かないな・・・しかたない。クイン、先にお前らが戦え」

「了解。じゃあ、準備してきます」

「山田先生！戦いは先にクインVS箕徒を行う」

「は、はい！わかりました！」

「・・・・・・・・さて、どうなるか・・・」

~~~~~

「クソッ！セシリアにフラグをとっとと建ててえってのに男と当たるとかついてねえ」

「悪いな・・・今ボクはかなり気性が激しいんだ。とっとと落とさせてもらうよ」

「お前みたいなモブが俺様みたいな転生オリ主様に勝てるわけないだろ。お前わかってんの？ww」

「織斑センセイ。もう殺<sup>ヤッ</sup>してもいいですよね？」

「ああ。構わん。はじめろ」

「クイン・シャラン、デザートストーム。目標を倒す」  
フチコロ

——ヘルストーム及び、ファング展開

「行けファング・・・さあ、その腐った根性ごとテメエを狙い打つ」

~~~~~

「はわゝゝすごいですねゝシャラン君」

「あれくらいは当然だろう。山田君、いままで彼が借りたターゲットの数は？」

「えゝつと・・・!!これは!!?5200個です!!」

「それをすべて真ん中を撃って落とした。あいつの腕は本物だ」

「嘘だろ千冬姉・・・」

バゴン!

「織斑先生だ。これを見る」

「ああ。・・・!!」

「この勝負・・・あつたかもしれないな」

彼女が見ているモニターの先では一方の機体がもう一方の機体の狙撃を受けてぼろぼろになっている様子が流れていた。

「（ふん・・・あの箕徒とかいうやつも口だけだな・・・）」

ドゴーン!!

——オルカレイ・箕徒、シールドエネルギー0。勝者・・・クイン・シャラン!!

少し前にさかのぼり~~~~~

「ほらほら! その程度かよ!」

アイツの撃ってくる弾丸をすべてビームで相殺し、当たるか当たらないかの位置を打ち続けていたが、飽きてきた。

「・・・飽きた。もう本格的に狙い打つ」

肩、腕、足、武器と順番に破壊していく。

「ふん・・・」

そして・・・

——イグニッション・ブースト
瞬時加速

アイツの眼前まで迫り、アイツの腹めがけてライフルを撃った。

ドゴーン!!

——オルカレイ・箕徒、シールドエネルギー0。勝者・・・クイン・シャラン!!

「ふん・・・所詮その程度だったか」

ボクの目の前に広がっている光景はぼろぼろになって倒れているア
イツとボコボコになっている大地だけだった。

「・・・帰る・・・」

クラス代表決定戦第一試合はあっけなく終わった。

17話（後書き）

こんかいも休み・・・理由はこれから予定があつて時間がないから。

今回も見てくださつてありがとうございます！
感想も待ってます。

ではまた次回も見てくださいね？

18話（前書き）

PV50000アクセス突破！！

感謝感謝です。

では、どうぞ！

18話

千冬SIDE

「シャラン！お前凄いな！！特に的5200個のど真ん中打ち抜いた奴！！」

「何処で知ったか知らないけどありがとう。でもボクはそんなに凄くないよ」

「謙遜するな。十分じゃないか」

「ありがとう」

今、私の前で戦いが終わったシャランと一夏と篠ノ之が話している。

「うむ。確かにすばらしい腕だったな。さすがは、ロックオン・スト成層圏を狙い打つ男、だ」

「なんでそれを知っているのかはともかく・・・ブリュンヒルデ織斑先生にほめられるとは光栄です」

・・・束が自慢げに一から百まで教えてきたからな・・・。

「ふん。織斑、次はお前の番だ」

「わかった千冬姉」

「織斑先生だ・・・」

一夏はそれを聞いたか聞いてないか・・・オルコットとの戦いのためにカタパルトのほうへ向かっていった。

「・・・織斑先生」

「なんだ？クイン」

「ボクは次の試合、棄権します」

「ほう。何故だ？」

「ボクは相手を怪我させてしまったんで」

「・・・そうか」

こいつ・・・意外とそういうのを気にするタイプなのか・・・。

「・・・それと、」

「なんだ？」

「この勝負・・・どっちが勝つと思いますか？」

どっちが勝つか・・・か。

「お前はどっちだと思う？」

「・・・一夏に伝えといてください。おめでとう、って」

「そうか」

おめでとう、ということとは勝つことを信じている・・・ということとなのだろう。

「では、先に失礼させてもらいます」

やつはそのまま部屋を出て行った。

「さて一夏。お前は信じてくれている気持ちを踏みにじるなよ」

さて、戦いの幕開けだ。

千冬SIDE OUT

18話／クラス代表決定戦 中編

一夏SIDE

よう。織斑一夏だ。

今、俺はISに乗ってセシリア・アプリコット？だっけかと向き合っている

あの、セシリア・クロワツサンとか言う奴は正直気に入らない。

力を持っても闇雲に振りかざすだけなら、それはただの暴力だ。

・・・暴力を振るうことしか能がないなんて、人に猿、猿言っけど
アイツのほうが猿に近いんじゃないか？

「オルコットですわ！さっきから全部聞こえていましたよ！！」

「そうかそれはわるい（棒）」

「キイイイ！！もう許しませんわ！いくら泣いて謝っても絶対に
手なんか抜いてやりませんわ！！」

そう言うと同時にオルコット（？）がレーザーを撃ってきた。

「っ！いきなりだな」

「試合は始まってますのよ！いきなり何もなくてよ！」

それもそうか

「ちい！」

何か武器は・・・近接ブレード一本！？

「これだけか！」

「どうしましたの？ かかってこなくって？」

おもしろい・・・

「こい！」

手に近接ブレードが展開される。

「近接ブレード？ あなた何を考えてますの？ 中距離射撃型の私相手に接近戦なんて！」

「やってやるさ・・・！！！」

「さあ踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・テイアーズの奏でる”円舞曲^{ワルツ}”で！」

18話（後書き）

デユオ様よりいただいた疑問

「転生者けっこうよいんですか？
そのことをできれば知りたいです」

とのことですが、返答でも書いているんですが、

『原作キャラに比べれば（更識姉妹を除くが）凄く強いです。

ただスペックや身体能力などがシャラン君の方がものすごく上だし、
戦闘経験が転生者のほうが少ないだけです。』

ということですよ。

OKですか？

今回も見てくださってありがとうございます。

おかげさまで、PV50000アクセスを突破しました。

本当に感謝感謝です。

次回も見てくださいね？

感想もお待ちしております！！

19話（前書き）

今回はいろいろと書いたんですがたいして原作と変化ないですよ。

飛ばす方は飛ばして結構ですよ。

見る方は途中で見るのを投げ出さないことを約束してくださいね？

OKですか？OKですね？約束ですよ。絶対ですよ！

では本編どうぞ！

19話

「ちっ！」

俺は今、全方位からくるBTLレーザーの雨を必死に回避していた。
・・・そんなとき、あることに気がついた。

一度ビットはフィン・アーマーに戻る。

フィン・アーマーから四対のビットが切り離され、もう一度飛翔する。

しかし、オルコットは動かない・・・いや、動けないのか？

確かにさっきからビットを操っているときは射撃をしてこない。

「（・・・・ここだ！）」

ザン！

・・・・ドガン！

「わかったぜ。この兵器は、お前の意思を受けないと動かない。そして、その制御に意識が集中するために、お前自身はその間、攻撃ができない……だろ？」

「わかったぜ。この兵器は、お前の意思を受けないと動かない。そして、その制御に意識が集中するために、お前自身はその間、攻撃ができない……だろ？」

「……っ！」

右目が引きつった………凶星だな。

「そろそろ反撃といくぜ!!」

—夏SIDE OUT

管制室~~~~~

「すごいですね織斑先生。織斑君、これが2度目の起動ですよ？とてもそうは見えませんか？」

「私の弟だからな、当然だ」

「弟さんが大好きなんですネ」

「からかってるのか山田先生！」

「い、いえそんなことは……」

「ふん！……馬鹿者が調子に乗ってるな」

「？なんでわかるんですか？」

「アイツは興奮したり油断すると左手を動かす癖がある」

「確かに動いてますね。さすがに姉弟の癖はよくわかってるんですね」

「ま、まあな」

「照れてるんですか？照れてるんですね？」

ギリリ！

「あ、織斑先生！割れちゃう！割れちゃいます！謝りますから許してくださいい！」

「ふん！私は身内ネタでからかわれるのが嫌いだ。いい加減学習してくれ」

「・・・一夏・・・」

~~~~~

「（全基落としたぜ！あとはアイツも丸腰だ！）ぜやあああ！！」

「・・・かかりましたわね。ブルーティアーズは4機だけではないくてよ！」

な！ミサイル型！避けられない！

ドガン！

その瞬間、俺の視界は白く塗りつぶされた。

管制室~~~~~

千冬SIDE

「一夏っ！」

「機体に救われたな、あのバカめ」

「え？」

麻耶が画面に目を向けるとそこには……………

純白が真の姿で立っていた。

~~~~~

「まさか今ファーストシフト！あなた今まで初期設定で戦っていた
と言いますの！」

「そうみたいだな……………でも。もうこの機体は本当の意味で
俺専用になった」

武器のスペックが表示される

―雪片弑型……………

「ああ。俺は最高の姉さんを持つたよ」

千冬姉が振るっていた形名……………雪片。

バリアー無効化攻撃を放てるとシャランは言っていた。

「……バリアー無効化攻撃は文字通り相手のバリアーを切り裂いて直接ダメージを与えるらしい。
しかし、その分エネルギーの消費も激しい。」

「俺も、俺の家族……仲間を守る」

「は？あなた何を言ってる……」

「とりあえずは助けてくれたシャランと千冬姉の名前を守るさ。弟と仲間が不出来じゃ格好がつかないからな」

零落白夜……発動！

「行くぜ！おりやあああ！！」

「……！！？」

「これで……終わりだ！」

ブ~~~~~！！

…セシリア・オルコット。シールドエネルギーエンプティ。勝者、
織斑一夏！…

19話（後書き）

今回は半一夏無双でした。

・・・ということで今回は原作主人公、織斑一夏さんと、今作主人公にきていただきました。

シャ「やあ」

一「ど、ども」

質問です。守りたいものはありますか？

シャ「ボクに関わった人すべて・・・かな？」

一「とりあえずは千冬姉の名前と仲間を守るさ」

了解です。

次！好きな人はいますか？

シャ「うーん。まだよくわからないな」

一「シャランと同じだ」

次！一番扱いやすい武器は？

シャ「ライフルかな。でも、銃ならほとんど使えるよ」

一「剣だな。銃は無理だな。千冬姉にも言われたし」

最後！今の状況は？

「正直言つて、死ぬる」

ありがとうございましたー！

今回も見てくださってありがとうございます。

「次回は前回？の別視点バージョンだ」

「シャー！な！ボクが死んでしまっじゃないか！」

一・作「大丈夫だ逝ってこい」

「全然大丈夫じゃねええええ！」

あれは放っておいて、
感想などもお待ちしております。

一「次回も見てくれよ」

バイバーイ

20話（前書き）

前回書いたとおり、別視点です。

では本編どうぞ！

20話

「シャラン！お前凄いな！！特に的5200個のど真ん中打ち抜いた奴！！」

「何処で知ったか知らないけどありがとう。でもボクはそんなに凄くないよ」

「謙遜するな。十分じゃないか」

「ありがとう」

「うむ。確かにすばらしい腕だったな。さすがは、ロックオン・スト成層圏を狙い打つ男だ」

「なんでそれを知っているのかはともかく・・・ブリュンヒルデ織斑先生にほめられるとは光栄です」

「ふん。織斑、次はお前の番だ」

「わかった千冬姉」

「織斑先生だ・・・」

「・・・織斑先生」

「なんだ？クイン」

「ボクは次の試合、棄権します」

「ほう。何故だ？」

「ボクは相手を怪我させてしまったんで」

「・・・そうか」

「・・・それと、」

「なんだ？」

「この勝負・・・どっちが勝つと思いますか？」

「お前はどっちだと思う？」

「・・・一夏に伝えといてください。おめでとう。って」
「そうか」
「では、先に失礼させてもらいます」

~~~~~

「待つてよ」

スタスタスタスタ

「待つてつてば」

スタスタ・・・ピタ。

「なに？奏」

「いや・・・その・・・おめでとう。」

「・・・その・・・か、かか、格好よかった、よ／＼」  
「あ、ああ。ありがとう／＼」

20話／二人きりで整備！！？・・・これはやばい・・・ 前編

・・・。。。

「（これは・・・かなり気まずい・・・）」  
「（どうしよう言っちゃったよ！！！！！！！！）」

「「あの！」」

「あ、いや・・・先にどうぞ奏」

「いや・・・シャラン君からでいいよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「えっと」

「奏・・・機体の整備、手伝ってくれないか？」

「・・・・・・・・え？」

「いや、予定があるならいいんだ。一人でやるから」

「いやいや、やるよ！やらせて！」

「お、おおう」

・・・・・・・・・・。

「（くあ・・・・・・・・。無言の重圧がツライ・・・・・・・・）」

「（え！？え！？えっとこのままだと二人きり！！！？どうしよう  
！！！？）」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「とりあえず整備室に行こうぜ！」

「ああ、うん。そうだね！」

~~~~~  
~~~~~

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

カタカタカタカタ・・・・・・・・

「（ああ・・・どうしよう・・・。女子と二人きりなんてどうすればいいんだ!?）」

「（うう）。シャラン君と二人きりだよ!!・・・でもなんでだろう?誰かに似てる気がするんだよね・・・）」

カタカタカタカタ・・・

「（ああもう。どうすればいいんだよノどうすればいいのさ!!!）」

・・・。





## 21話（前書き）

前回のつづきです。

シャランは耐えられるのだろうか・・・！！

本編どうぞ！

21話

力  
夕  
力  
夕  
力  
夕  
・  
・  
・  
・  
・

～前回のあらすじ～

ちよっ！勢いで二人つきりになってしまった。

?!-!-!-!-!

~~~~~

21話／二人きりで整備!!!?・・・これはやばい・・・
後編

「あゝゝゝゝゝ。これは……精神的にツライ……」

「んっ！どうしよう……？これはチャンスなんだけど……」

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
○

「ねえ、シャラン君は今まで何処にいたの？」

「何処ってね。とある天才さんの所かな？」

「やっぱり？」

「やっぱりって？」

「なんかそんな気がしてたから」

「そうか」

.....。

「シャラン君さ、何時からIS動かせるのを知ってたの？」

「.....まあ、少なくとも一夏たちと出会った頃にはわかってた・

・かな？」

「そうなんだ。じゃあ、たまに休んでたのはなんで？」

「あゝ。言ってなかったっけ？」

「この機体はボクが設計したんだよ」

「.....へ？」

「だ・か・ら！この機体はボクが全部設計したんだって！」

「うそ〜！？」

「ほんとだよ〜！！！」

.....

「「ぷ.....」」

「はははははははは！」

「ふふふふふふふふ！」

「おかしいな。こんなに笑ったのは久しぶりだ！」

「そうなの？私もだよ！」

「意外と似たもの同士だな」

「そうだね.....」

「ねえシャラン君」

「なんだい？」

「シャラン君ってさ。私の初恋の人に似てるんだよ。雰囲気とか外見とか」

「へ、へー。名前はなんていうんだ？」

「名前はね、レオン・アルファードっていうんだよ」

「（これはまずいぞ。ばれたらめんどくさいことになる）へ、へー。

「そうなんだ」

「その真紅の髪とか、なんていうかそのおどけているけど何処か真面目なところとか」

「ふん」

「でも、振られちゃったんだけどね……………」

「（あつ…………）」

「あ！ごめんね。なんかこんな雰囲気にしちゃって」

「いや、ボクが悪かったんだ。こんな話題振ってしまったて」

「ふふふ。そこも似てる。まさかの同一人物だったりして」

「！！？い、いやまさか……そんな訳ないじゃないか！」

「？まあそうだよな」

「そうだよ。アハハハハハハ……………」

「？変なシャラン君」

「（あ、危ない。どれだけ勘が鋭いのコイツ……………」

「ん？あ！シャラン君！今度どこか行こ！」

「？何処にだ？」

「何処かに！」

「ん？まあいいけど。」

「もう整備とかも終わったし戻ろっぜ」

「そう思っで時計を見るともう直ぐ19時だった。」

「まあ、寮に帰る前に食堂行かなきゃな」

「ん。そうだね」

「じゃ、行くか」

「うん」

「彼らはそこを出て、食堂へ向かった。」

21話（後書き）

今日中にもう一話できたらUPします。

今回も見てくださってありがとうございます。

もう感謝の心でいっぱいです。

感想などもお待ちしています。

次回もまた見てください。

では！ノシ

22話（前書き）

遅れてしまいました。すいません。

では本編どうぞ！

22話

翌日、朝のSHR。

予想内のことが起こっていた。

「では、一年一組代表は織斑一夏さんに決定です。あ、一つながりでいい感じですね!」

山田先生は嬉々として喋っている。

あ、一夏凄いいしまったって顔してる。

「そうだよ・・・勝ったら代表だったよ・・・」

「なんかゴメン」

「いや、お前の所為じゃないだろ」

「いや、ボクが辞退したからさ・・・」

「いや、気にしてないから。大丈夫だって」

「・・・ありがとう」

「まあ、代表は織斑一夏、副代表はクイン・シャラン。これでいいな」

『はい!』

「・・・は?」

22話/気がついたら副代表になっていたんだけど・・・。

「先生!」

「はい。クイン君」

「副代表なんて話聞いてないんですけどー」

「それは、つい昨日決まってるな。急遽お前が抜擢されたわけだ」

「はあ．．．左様ですか．．．」

これは折れるしかないか．．．

「一夏．．．これから頑張ろうな」

「ああ。そうだな．．．」

その日の晩~~~~~

一夏SIDE

「織斑君、シャラン君、クラス代表&副代表決定おめでとう!!」
『おめでとう!!』

パンパン!

「はははははははは．．．」

なんでこうなった．．．。

‘あの’シャランですら引きつった笑い．．．というか苦笑いしか
できてないぞ。

「．．．．はあ」

なんだよあの馬鹿でかく書かれた『織斑一夏、秦刹狼クラス代表&
副代表就任パーティー』って。
全然ちつともめでたくないぞ。

そうか、就任パーティーか．．．．はあ。

「いやーこれでクラス対抗戦も盛り上がるねえ」

「ほんとほんと」

「ラッキーだったよねー。同じクラスになれて」

「ほんとほんと」

おい。あれって2組の奴だよな。

「（一夏……。あのほんとほんとしか言っていない奴って）」

「（ああ。明らかに2組の奴だよな）」

「人気者だな、一夏。それにシャランも」

「「本当にそう思うか？」」

「ふん……」

……。はあ、箒もなんか怒ってるし……。
不幸だ……。

一夏SIDE OUT

シャランSIDE

なんか疲れたから帰ろうかと思ったとき、その人は現れた。

「はいはい、新聞部です。話題の新生組織一夏君とクイン・シャラン君に特別インタビューをしました」

オーと一同が盛り上がる。

「あ、私は二年の黛薫子^{まいかほこ}。よろしくね。新聞部部长やってます。はいこれ名刺」

「は、はあ」

「ではまず織斑君！ クラス代表になった感想を、どうぞ！」

一夏にボイスレコーダーを押し付けるように向けた。

「え、えーと……まあ、なんというか、がんばります」

「えー。もっといいコメントちょうだいよ。俺に触るとヤケドするぜ、とか！」

このセンパイが、何を望んでるのか分からなくなってきたぞ？

「自分、不器用ですから」

「うわ、前時代的！」

おいおい。日本じゃ有名な俳優の台詞を馬鹿にするなよ。

「じゃあ、まあ適当に捏造しておくから良いとして」

え！？そんなこと言っているのかよ！？

「じゃあ次、クイン君！ 何か一言！」

「ボクの目に入った獲物はすべて狙い打つぜ！・・・とかどうです？」

「いいね。最高だよ」

ん？あれ？まさか捏造されない！？

結構やばい発言したから危険人物扱いされるぞ！明日から。

「はい次、セシリアちゃん！」

「わたくし、こういったコメントはあまり好きではありませんが、仕方ないですわね」

とか言ってるが、すぐにコメントできる位置に居たのは気のせいだろうか？

「コホン。ではまず、どうしてわたくしがクラス代表を辞退したのかというと、それはつまり――」

「ああ、長そうだからいいや。写真だけちょうだい」
「さ、最後まで聞きなさい！」

「いいよ、適当に捏造しておくから。よし、織斑くんに惚れたからってことにしておこう」

「なっ、な、ななっ……！？」

「そんな馬鹿な」

「そ、そうかなー？」

「そ、そうですわ！ 何をもって馬鹿としているのかしら！？ だ、大体あなたは――」

「はいはい、とりあえず三人で並んで。写真取るから」

「えっ？」

「注目の専用機持ちだからね。あ、こうしてこうして」

センパイに手を引かれて、三人の手が重なる。

一夏を中心に向かって左がセシリア、右がボクだ。

「よし、それじゃ撮るよー。35×51÷24は？」

「え、えっと……？」

「……74・375！」

「クイン君正解！」

パシャッと切られるシャッター。

——それと同時に、その場の全員がシャッターに納まった。

「なんで全員入ってるんだ？」

「なんつー行動力……」

その後、結局十時を回る頃まで『織斑一夏クラス代表就任パーティー』は続いた。

……こういうときの女子のパワーってすごいよね。

〃
〃
〃

いかがでしたでしょうか？

今回も見てくださいありがとうございます。

感想、ご意見などもお待ちしております。

では次回、また会いましょう！ ノシ

23話（前書き）

～前回のあらすじ～

一夏とシャランがクラス代表 or クラス副代表になった

~~~~~

## 23話

「今日はみなさんに紹介があります」

・・・ん？なんだ？

「今日は転校生を紹介します。刃雅 瑞貴君、入ってください！」  
「はい！」

・・・なんだ？凄い嫌な予感がするぞ？

さっき来た中国の女の子ばりの元気さあふれる声。

・・・やばくね？

こいつは・・・

「こんにちわ。はじめまして。刃雅 瑞貴です。よろしく」

しかも男だし・・・。

どっかで見た気がするんだよな！。

「ちなみにそこに居るシャランとは幼馴染の関係です！」

あ！思い出した。

「お前、瑞貴か！？」

「うん。久しぶり。シャラン？でいいのかな？今は」

「ああ。今はそう呼んでくれ」

「わかった」

びっくりだな。

こんなところでボクのセカンド幼馴染が出てくるとは思わなかった。

## 23話／襲来！二人のセカンド幼馴染

昼休み~~~~~

「いやゝ。男が増えて助かったよ」

「本当にな。でもまさか瑞貴だとは思わなかったが」

「・・・そこまで大変なの？」

「「ああ」」

「・・・・結構キツいんだね」

本当にな。

ボクと一夏以外は全員女子だからね。

初日は男子が消費税以下の学校でどうするべきか悩んだけどね。

「瑞貴は今まで何処に居たんだ？」

「いやねゝ。今までフランスのシャルの家に居たんだゝ」

「シャルって？」

「シャルロットだよゝ」

「はあ！？」

シャルロットって・・・。

「いや、最近のメールの中に友達が居候してるってあったな・・・。  
」

「え！？シャルと知り合いなの！？」

「いや、ただのメール友達だ」

「そうなんだ」

「ああ」

「なあ、俺をおいて話をしないでくれ」

「悪い悪い」

「そついや刃雅とシャランは何処で知り合つたんだ？」

「普通に日本だけど」

「え！？」

「驚くなよ。ちーかその中国人誰だよ」  
チャイニーズ

「あ！こいつは俺のセカンド幼馴染の鳳」  
ファン 鈴音だ」  
リンイン

「よろしく」

「ああ。よろしく」

まあどうでもいいんだが。

「瑞貴の部屋って何処になるんだ？」

「確かシャランと同じだったはずだよ」

「そうか。なつかしいな」

「なにが？」

「久しぶりにこうやって話したからな」

「そうだね。・・・そついや奏って元気にしてるかな？」

「元気だろうよ。あいつも此処の学校に入ってるしな」

「そうなんだ」

「そついや、お前とシャルロットの関係は何なんだ？」

「いや、その・・・」

「おいおい。教えないはないよな？」

「い、いや、その・・・」

おや？こいつにしては珍しく齒切れが悪いぞ？

コイツは自分が思ったことや、発言は堂々としっかりというタイプ

なんだが……。

「は！そういうことか！」

「な、なにがさ！？」

「いや、お前はシャルロットのことが「わ〜〜〜！！」「も〜〜も〜〜」

いやコイツなんなんだよ。

わかったから言おうと思ったただけなのに……てかさそろそ息が出来なくて苦しいんだが。

「む〜〜！！むむ〜〜！！」

「おい。刃雅。コイツ苦しそうだぞ」

「わ！わわ、ゴ、ゴメン！！」

「いや、いいんだ。今のはボクが悪かったからね」

「そ、そう」

「まあ、そういう関係なのはよくわかった。ただ頑張れとだけ行つとくよ」

「う、うん」

「とりあえずは早くメシ食って着替えに行こうぜ」

「ああ、そうだな／うん。そうだね」

まあ、なんだ。わかったことといえば……

「これで気が楽になる……」

## 23話（後書き）

今回登場した瑞貴さんとシャランがゲストで来てくれました。

瑞「どうも」

シャ「よろしく」

質問に入ります。

二人は何年の頃に出会ったのですか？

瑞「記憶が正しければ小学4年の頃だったかな？」

シャ「ああ。そのときに転校してきたコイツは虐められててな、助けたら仲良くなった」

そうですか。

次、二人のファースト幼馴染は誰ですか？

瑞「五反田 弾かな。おもしろい奴だよ」

シャ「ボクは奏だよ」

そうだったんですか。

弾がファースト幼馴染なのはどうしてですか？

瑞「私の両親は弾の両親と仲良かったからですな。

あと、昔はこちらにすんでたんですよ」

シャ「へえ」。初めて知った」

最後に、今好きな人はいますか？

瑞「ええ〜！？・・・いや、その・・・いるけど・・・／＼」  
シャ「わからないな。そんな感情」

そうですか。

~~~~~

今回も見てくださってありがとうございます！

瑞「この小説も気がついたらたくさんの方が見てくださっているよ
うで、

感謝でいっぱいですね」

シャ「感想なんかも待っているぞ」

次回も見てくださいね？

シャ・瑞「じゃあな／またね〜」

24話（前書き）

前回のあらすじ~~~~~

せかんどおさななじみがあらわれた！（某RPG風に）

~~~~~

デユオ様感想ありがとうございます。  
全力でがんばります！

## 24話

放課後―今日は瑞貴の荷物を運びこむのと、ボクの荷物の整理があるので訓練は不参加になった。

「これでラストかな？」

「うん。ありがとうレオン」

はぁ・・・こいつは・・・。

「ボクは今はシャランだよ」

「ああ！そうだったね！ごめん」

「忘れないで欲しいな」

「うん。これを聞かなくてもしたら困るのはシャランだもんね」  
「まったくだ」

聞かれたらなんて答えると言うんだ。

コンコン

「ん？どうぞー」

「シャラン君？今いいかな？」

「ああ」

ガチャ

「いらっしやい」

「久しぶりだね奏」

「・・・え？」

目を閉じたり開いたりしてるな。

「……そこまで驚くか？普通。」

「瑞貴……君？」

「そうだよ。私も動かせたから入ることになったんだよねー……束さんの所為で（ボソ）」

24話／やばい………ばれた………。

「瑞貴……君？」

「そうだよ。私も動かせたから入ることになったんだよねー……束さんの所為で（ボソ）」

「ああ……お前もなのか？」

「シャランも？」

「ああ。あの人の無茶振りでこんな目にあった」

「大変だね」

「お前もな」

「大変そうだね二人とも」

「「ああ／うん」」

いやはや、さっきの話聞かれてないよな？そうだよな？な？

「そつえばさっきシャラン君のことレオンってよんでたけどなん

で？」

聞かれてたーーーーー！！

「ああ。そういえば言ってなかったね。シャラン君は私が外国を回ってたときに会ったんだよ」

「え！？そうなのシャラン君！？」

あ！アイツ目で「あわせて！」って訴えてる。

「ああ。その時はさ、俺ちよつとした事やってて偽名で当たり障りのない‘レオン’って名乗ってたんだよ、な？」

「そうだよ。だから間違ってレオンってよんじやったんだ」

「へーそうなんだ」

信じてくれた・・・か？

「そうなんだレオン君」

「・・・は！？」

「いや、本当のことを言ってよ・・・ね？」

「なんのことを言ってるのかな？」

「まだとぼけるの？」

「なんのこと・・・「レオン君なんでしょ？」・・・？」

「だから！レオン・アルファード君なんでしょ！？」

「いや、ちが・・・「違うわけない！」・・・！？」

「違うわけないよ・・・。だって雰囲気もその話し方も外見も・・・すべて同じだもん」

「・・・奏」

「だから・・・全部話してよ・・・せめて私にくらい本当の自分をおしえてよ・・・。」

「奏・・・わかった。全部話すよ・・・だから、また明日・・・来てくれないかな？」

「うん・・・！わかった。おやすみシャラン君、瑞貴君」

「「おやすみ」」

バタン

「・・・話さなきゃいけない・・・全部」

「そうみたいだね」

明日・・・全部話して・・・それから、

「赦してくれるかな・・・？」

「何を？」

「アイツに今まで嘘をついていた・・・そのことさ」

「赦してくれるさ。きつとね」

「そうか・・・」

なんにしても明日はちゃんと向き合って話さなきゃな・・・。

「じゃ、お休み」

「お休み」

~~~~~10:42 1555室・・・消灯。

24話（後書き）

「や・ば・い・ば・れ・た！」

どうするんだろうね我らの主人公さんは。

「どうしよう」

まあいいや。

今回も見てくれてありがとうございます。

「また次回見てくれよ」

感想待ってます。

ではまた次回！バイバイ！ ノシ

25話（前書き）

おくれてしまい申し訳ありません。

今回は全部話す直前までになっています。

では、本編ドゾ！

デュオ様、毎回毎回感想ありがとうございます。

25話

ー夏SIDE

今日の朝、いつもの教室にすげえ違和感があった。

25話／異常？

「・・・・・・・・・・」

「（なあ瑞貴。あいつなんか様子がおかしくないか？）」

「（ちよつと・・・まあ、気にしないでください）」

「（すげえ気になるんだが・・・）」

「・・・・・・・・・・」

「なあ、シャランどうしたんだ？」

「！？・・・なんだ一夏か」

「お前なんかおかしいぞ」

「そうか？」

「ああ」

「まあ、気にしないでくれ。特になんでもないから」

ー夏SIDE OUT

シャランSIDE

「お前なんかおかしいぞ」

ボクがおかしい？

「そうか？」

「ああ」

「まあ、気にしないでくれ。特になんでもないから」

ボクは一夏にそう答えた。

「（まあ、大問題が起こっているんだが）」

「?どうかしたのか?」

「いや、なんでも」

そう、大問題だ。

奏にボクの正体がばれてしまったのだ。

さすがにこれはマズイ……………。

「はあ……………」

どうなるんだろうか……………。

「（シャラン）」

「（なんだ瑞貴）」

「（あまり考えすぎてもいいことはありませんよ）」

「（そうか）」

「（ええ。ですから）」

「（ああ。わかってる。考えすぎなきゃいいんだろ）」

「（はい）」

わかってる。わかってるさ……………。

放課後……………

「なあ、シャラン。具合が悪いなら訓練休んだ方がよくないか？」

「大丈夫だ……」

「だめだよシャラン。最近の君は少し煮詰めすぎだ。休んで」

「しかし……」「しかしもなにもない！」……「わかった」

「うんうん。素直でよろしい」

「はあ……」

とりあえず部屋に帰るか……。

シャランSIDE OUT

奏SIDE

「（だ、大丈夫だよね！？今多分部屋にいるよね！？）」

私は今、シャラン君？の部屋の前に居る。

なんでかというと、

「（なんで昨日あんなこと言っただろう……うう……）」

「

私は昨日シャラン君に「全部話してよ……せめて私にくらい本当の自分をおしえてよお」って言った。

その答えにシャラン君が「全部話すよ……だから、また明日……

来てくれないかな？」なんて言って。

……結局今の状態になるわけで……。

「（うう……。ノックするの、ノックするのよ私！）」

「……？どうしたんだ奏？」

「ふえ！？」

「いや？どうしたんだ？と聞いてるんだが。・・・」

「いやあの・・・昨日の続きで話を聞きに来たんだけど・・・」

「そう。じゃ、中に入って。全部話すから」

続く・・・

25話（後書き）

今回は書くことがないので次回に持ち越します。

では次回もまた見てくださいね？
感想お待ちしています。

26話（前書き）

今回はシャラン君の過去話。

遅れてしまつて申し訳ありません。

本編ドゾ！

26話

「さて、どこから話そうか」

26話／過去……
いままで

ボクの部屋………奏とボクは向かい合って座っていた。

「さて、どこから話そうか」

「まずはどこで何をしてたの？」

「そうだね……ボクはさ、こういうのはなんか躊躇われるけど、君を振ったじゃないか」

「………。」

「そして君を振った次の日からボクは学校に行ってない。何故かわかるかい？」

「全然」

「ボクはその日からアメリカに行くことになってた」

「え！？」

「君を振ったのも、別に嫌いだったからじゃない。むしろ好きな方だった」

「え……／／／」

でも、それでも・・・

「受け入れられなかった。どうせ離れ離れになって悲しい思いをさせるだけだから」

「どうして・・・？」

「どうして・・・。。」

「何がだい？」

「どうしてそんな重要なこと教えてくれなかったの？」

「言えるわけないだろ・・・大切な・・・大切な人なんだから・・・」

「？なんていつたの？」

「なんでもない！」

「？そう」

「あ、ああ。なんでもないから気にするな」

き、聞かれてなかったよな？よ、よかった。

「と、とりあえず話の続きをするよ」

「う、うん」

「アメリカに行ってからもしばらくは楽しい日々が続いた・・・」

「・・・？しばらくは？」

「そう。しばらくはだ。」

「・・・でも、あの日事件は起こった」

しばらくは続いた楽しい時間は突如終わりを告げた。

そう。あの時ボクら家族がいたビルで爆弾テロ起こった。

その時のテロに巻き込まれて父さんも、母さんも、姉さんもみんな死んだ。

兄さんだけは日本に残ってみたいだから多分生きてるだろうけど。

そこからボクは変わった。

人と関わろうとせず、人に助けを求めず、唯一人で戦ってきた。

一母さんたちの遺産を狙うもの達《金の亡者》、詐欺師。

あらゆるものと戦ってきた。

「でも、その時その人は現れた」

その人は初めてボクに「大丈夫だよ。私が守るから」と、
「安心しな。もう怖い思いはさせねえ」と言ってくれた。

あの時は何故信じたのかわからない。

・・・でも、

「今だから言える。あの人たちは本当にボクのことを心配してくれていたから、本能的に『大丈夫だ』って言ってたんだと思う」

「それほどにまで大切な人だったんだね」

「うん。・・・でもISを動かしてからは変わった」

彼女たちはボクを自分たちのものにしようとする上層部の思惑に従わなければいけなくなった。

彼女らとて軍人だ、上官の命令は絶対である。

「ボクはそれを拒んで逃げ出した」

「・・・もういいよ」

「でも逃げるところはなかった。所詮ボクは身寄りがない子供だっ

「ただ」

「やめて……」

「結局、今みたいに束さんの力を借りて別人として過して」

「やめてよ……」

「滑稽な話だろ？信じてた人たちも結局は命令に逆らえない」

「やめて！」

「ん？なんだい」

「そんな悲しそうに話すのはやめてよ……」

「悲しそう？全然悲しくないよ？」

「嘘だよ……だって泣いてるよ？シャラン君」

「泣いてる……？」

「うん。泣いてる。きっと心では納得してるつもりでもまだふっ切れてないんだよ」

そんなことは、

「そんなことな……」「ないはずないよ！」……………」

「ないはずない。だって泣いてるもの」

泣いてる……？泣くとはなんだっけ？

「貯め込まないで……。泣いてもいいんだよ？」

「うつ……うつわ……」！

ボクは大声で泣いた。

周りのことなど考えず、ただ泣いていた。

~~~~~

「落ち着いた？」

「うん．．．．．」

「よかった」

今の時刻は7：30分。

どうやらかなり長い間泣いていたらしい。

「そういえばねシャラン君？」

「なんん．．．！？／／／」

「ふふん。シャラン君のこと諦めてないから」

彼女はボクの唇を奪ってから宣言した。

「だから覚悟しててね？」

ボタン

．．．．．。

「へあ．．．．？」

あれ？今のってキスだよね．．．ってキスう！？

「きゆう．．．．／／」

パタ

ガチャ

「ただいま！シャラ．．ン？」

「きゆう．．．．」

「大丈夫かシャラン！シャラン！？」

シャランSIDE OUT

## 26話（後書き）

そして締まらないのはシャランクオリティ。

シャ「いや、違うからね!？」

瑞「そこまで否定しなくてもいいと思うんだ」

そしていつもながら無視される変態。

—「変態って誰だ？」

っていうか主人公にすら覚えてもらってないwwwワロスwww

シャ「てか今回のなにさ!!？」

今回ののはお前がリア充コノヤローって話だよ。

シャ「訳わかんねえ!？」

~~~~~

—「今回も見てくれてありがとな」

瑞「この作品も気が付いたらお気に入り50件突破したみたいで・・・」

シャ「本当に感謝感謝だな」

次回もよろしかったら見てくれるととてもうれしいです。

奏「感想お待ちしてます」

おまけ~~~~~

シャ「最後の冗談だよな？」

奏「ん？本気だよ？」

シャ「ジイイイイザアアアアアアス!!」

27話（前書き）

すいません。かなり間が空きましたが27話です。

27話にして漸く対抗戦に入りました・・・。

長かったなあ・・・（泣）

では、本編どうぞ！

27話

27話／クラス対抗戦^{リーグマッチ}開戦！！

ドガアアアアアン！！

よう、いきなりだが最近胃がストレスでマッハなシャランだ。
そしていきなりだが一夏がまたやらかした。

「言ったわね……………！！」

「あー」

「もう絶対ブツ殺すから……………！！」

そういつて鳳は出て行った。

「はあ……………」

「一夏？いい加減腹括ったほうがいいぞ」

「うん。ああいう娘に体型のこと言った君が悪いんだから」

「……………そうだよな……………」

「つまるところ勝つても負けても謝るわけだ」

「……………はあ……………」

「しかも負けたら彼女の言いなりだしね」

まったく……………あの鳳に胸のことを言うとか……………馬鹿なんだろうか（シャラン）

彼もシャラン並みの鈍感ですね・・・まあ、シャランは少し前にや
つと奏の気持ちに気付きましたが（瑞貴）

やばい・・・鈴に胸のこと言っちゃった・・・（一夏）

朴念仁とは思っていたがこれはないぞ一夏・・・（第）

やっぱり馬鹿なんじゃないでしょうか一夏さんは・・・（セシ
リア）

これがあの現場での全員の心情である。

「てか、よく考えたらボクも戦うんじゃないか！」

『今更だな。オイ！』

~~~~~

「一夏、今謝るなら少しくらい痛めつけるレベルを下げてあげるわ  
よ」

「雀の涙くらいだろ。そんなのいらねえよ。全力で来い」

「一応言っておくけど、ISの絶対防御も完璧じゃないのよ。シー  
ルドエネルギーを突破する攻撃力があれば、本体にダメージを貫通  
させられる・・・てかそれよりも！」

ん？一夏と話していたファンがこちらを向いてきた。

「なんでアンタはISを起動してないのよ！」

「ん？」

「なめてるわけ？」

「違うよ。ただ・・・傍観者を気取ってただけだ・・・さあて、  
行こうかデザートストーム<sup>相棒</sup>」

「了解」

そういうと、ボクの周りを光が包んだ。

シャランSIDE OUT

鈴SIDE

「なめてるわけ？」

どうも、ファン・リンインです。

今、私は目の前に居るシャラン（？）だったかと話している。

「違うよ。ただ・・・傍観者を気取ってただけだ・・・さあて、  
行こうかデザートストーム<sup>相棒</sup>」

「了解」

そういうと、アイツの周りを光が包んだ。

「・・・つか、ISがしゃべった!!?」

「こいつはボクの相棒さ。Battle Auxiliary  
actics program・・・通称BAT<sup>バット</sup>だ」

・・・?

「BAT・・・?」

「ボクは愛称として『相棒』と呼ばせてもらっている」

BATは戦闘の経過と同時に100通り以上の戦術を組み立てる。  
操縦者はそれを戦闘と並行して確認して、戦う」

あれ？それって……。

「それは脳に負担がかかるからボク以外が使おうとすると必ず倒れるんだよね！。

あと、基本ボクは自分でビットの操作などをやってるけれども、半分くらいならB A Tでも動かせる。

……他にもハッキング能力とかもあるけど（ボソ）」

「……なあシヤラン。それだけか？」

「うん。ボクの隠してた力はこれだけかな？」

「あんたら……！いい加減はじめるわよ……！」

私は叫び、彼らに向かって衝撃砲を打った。

「うおっと！危な！」

「急だな」

「ちよつと待つてよ！私も居るよ！」

「……あ。ごめん奏」

「いいよ、鈴」

「奏って副代表なのか」

「そうだよ。負けないからねレ……シヤラン君！」

「一夏！アンタにこの前のこと後悔させてやるんだから……！」

「させるかよ！」

ここに二組の戦闘が始まった。

## 27話（後書き）

今回の説明コーナー（仮）はBATについてです。

シャ「BATというのは、Battle Auxiliary  
actics programの略で、

意味は戦闘補助用戦術プログラムだな」

このシステムは本編で出した以外にも束の手によって二つ機能を追加されています。

シャ「それについては次回ですからそのときだな」

ただ、片方はリミッター的なものだとは言っておきます。

これも、まあ、直ぐに解除されるのですが。

シャ「早いな！」

早くて、28、29話くらいでしょうか？

シャ「そういえば、奏って副代表なんだな」

意外と強いんだよ……実は裏設定で……

シャ「裏設定で……（ゴクリ）」

日本の代表候補生だったたり！

シャ「そんな馬鹿な！」

でもって、束さんのお気に入りに入ってたり。

シャ「意外だな」

ネタばれですがトーナメントで専用機を与えます。

シャ「強敵だな」

だね。

じつはその機体シャラン君が設計して、束さんが作ってたり。

シャ「ネタばれしすぎだ！」

あべし！（キラーン）

さくしゃ は そらへきえた

シャ「ふう。こんなかんじだが、今回も見てくれてありがとう」

B「こんな小説でももう直ぐ100000PV達成できそうです」

シャ「これも皆、読者の皆様のおかげだな……って相棒、なんで居るんだ？」

B「作者の代わりです」

シャ「そうか。感想なんかももらえると嬉しい」

B「主に作者の力の源になります」

シャ「じゃ、次回もお楽しみになー!」

B「では、また次回会いましょう」

そのころ作者~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~

~~~~~~~~

「うう……なんでこんな目に……」

?「さて、さっきシャラン君に言っただことについて詳しくO H

A N A S I しようか」

「ひい!それなんかちg……アッーーーーー!」

28話（前書き）

そろそろ一巻の物語も終盤に近づいてきました。

では、本編どうぞ！

HALHAL様感想ありがとうございます。

28話

「はぁ・・・アイツはまた、とんでもないものを作ったな」

「そうですねーって！」

・・・うむ？

「あれ！シャラン君が作ったものなんですか！？」

「うむ。あれはアイツと束が共同で開発したものだ。

まあ、アイツ以外には使えんが」

「姉さんが・・・」

あんな出鱈目なもの使えるのはアイツ位だ。

「あと、このことは誰にも話すなよ。・・・まあ篠ノ之は言わないだろうが」

さて、切り札の一部を切ったお前はどうか戦うかな。

千冬SIDE OUT

28話／乱入！謎のIS！！

シャランSIDE

「つく！」

よう。シャランだ。

今、ボクは必死で飛んでくる弾丸を避けている。

「（ふざけている。こんなに正確な射撃、普通はできないぞ）」

「シャラン君？どうしたのかな。避けてばっかりだね」

「（ここで使うわけにもいかないし・・・）そこだ！」

バシユウン！ドガン！

「きゃあ！」

相手が体制を崩したその隙に攻撃をする。

だが、回避された。

「訓練機だからって代表候補生をなめてもらっちゃ困るよ」

「（代表候補生だと！？なら）本気で行かせてもらうか」

相棒。スコルハティとファングの軌道任せた。

「了解」

あと、今から敵のISへのハッキングを行う。その間の着たい制御も任せる。

「了解」

「さあ、後悔するなよ？」

シャランSIDE OUT

一夏SIDE

シャランが相手と戦っている。

名前は・・・緋河さんだったわけ？

「鈴・・・」

「なによ」

「本気で行くからな」

「なによ！当たり前じゃない！」

気持ちでは負けない。

箒との剣道の特訓やセシリアのISでの戦い方・模擬戦。

そしてシャランと瑞貴との勉強・・・負ける要素が見つからない。

「いくぞ！うおおおおおおお！」

イグニッションブースト

瞬時加速。千冬姉とシャランが教えてくれたこれは、一回しか使えないが、奇襲には十分だ。

「！？」

「ぜやあああああ！」

もう少しで当たる！・・・そのとき

ズドオオオオオオオオン！！

「な、なんだ！？」

なんだ？ いったい何が起きたんだ！？

一夏SIDE OUT

く少し前にさかのぼってくシャランSIDE

「つくう。なにこれ」

奏は今、必死でフアングとスコルハティの攻撃をよけている。

だが、それだけでは終わらせない。

「（接続完了。後はハッキングするだけ・・・）」

「上方より巨大な熱源を感知」

ズドオオオオオオオオオン！！

「な、なんだ！？」

遠くであせったような一夏の声が聞こえる。

そして、その近くには謎のISがいた。

——所属不明の熱源を感知。ロックされています。

「っち！相棒！ハッキングシステム停止、コントロール全部こっちにまわせ！」

「了解」

「一夏！鳳！そっちは大丈夫か！」

「あ、ああ。なんともない。だけど俺がロックされちゃった」

「ボクと同じか。ならアイツを倒すまでボクらは逃げられないってことだね」

「そうみたいだな」

「一夏、鳳と奏と一緒にアイツを足止めして」

「なんでだ？」

「ハッキングを仕掛ける」

それしか方法がないからね、とボクは付け加える。

「・・・わかった」

「よし、じゃあ、はじめようか！」

「ああ！」

こうしてボクら対謎のISの戦いが始まった。

28話（後書き）

解説コーナー（仮）今回は次回出る変態（笑）の機体のスペックです。

シャ「機体だけなら強いんだろうけどな」

打鉄・改

武器：ブレード × 2

ショットガン

ライフル

シールド

シールドピアース

変更点：装甲を減らし、ブースターを追加した。
金色に塗装した。

こんなものかな。

シャ「使い勝手はよさそうなのにな」

乗り手が変態だからね。

~~~~~  
~~~~~

今回も見てくれてありがとうございました。

シャ「このコーナーで解説して欲しいことがあったら感想とともに
ドシドシ送ってくれ」

できるだけ解説したいと思います。

シャ「次回もまた見てくれ」

では、ごきげんよう。

10万PV達成記念番外編（前書き）

こんにちわ。片翼です。

今回はまさかの10万PV達成記念です。

正直言って最初は此处まで行くとは思っていませんでした。

本当に読者の皆様ありがとうございました！

では、番外編どうぞ！

10万PV達成記念番外編

「これはある、冬の出来事でした。」

20XX年、世界はISが出てきてから急激に女尊男卑が広がりました。

何故か？ISは女性にしか扱えないからです。

そのISが注目されたきっかけは「白騎士事件」でしたが、それに並んで有名な事件があります。

それは、「ロックオン・ストラトス事件」です。

これは、そのときの話です。

10万PV達成記念／成層圏を狙い打つIS

「回想~~~~~」

これは、寒い、寒い冬の出来事でした。

その日はクリスマス。人々は浮かれ、それぞれが思い思いのすごし方をしていました。

しかし、そんなときに事件は起こりました。

上空……遥か上空から10000を超える隕石が降ってきたのです。

ISたちは全機集められましたが、圧倒的に足りませんでした。

ISたちは1機、また1機とエネルギーが切れ、降りていきました。
人々は絶望しました。

今までの兵器を遥かにしのぐISでさえ、歯が立たなかったのですから。

——そんなとき、それは現れた。

人々の目の前で隕石が1個、また1個と破壊されていったのです。
人々が見た先に居たのはたった1機のIS。

長いライフルを構えたたった1機のISでした。
しかし、それは正確な射撃で空から降ってくる隕石を地上から打ち落としていきました。

その、射撃に後押しされ、ISたちも徐々に隕石を減らしていきました。

——しかし、悲劇は起こった。

ISの武装でも破壊できない巨大な隕石が近づいてきたのです。

人々はまた、絶望しました。

他のISもまた、1機、また1機と下りてきました。

「もう終わりだ。」誰もがそう思いましたが、それは諦めなかった。

手にしたライフルを構え、隕石に撃ち続けていたのです。

しかし、それでも傷ひとつつきません。

その機体はそのとき、べつな銃を構えました。

それは、人々から見て、人類の光になりました。

まだ、宇宙にあった隕石を地球からその兵器で消し飛ばしたのですから。

人々は口々にいいました。

「助かったのか？」と。

そして、皆喜び、そして生きていることを神に感謝していました。

そして、誰かがその、最大の功労者のことに気がつき搜索しましたが、そのときにはもう居ませんでした。

まるで、ミサイルをすべて切り落として、忽然と消えた白騎士のようにな……。

人々は後にこの事件をこう語りました……彼のした事に因んで……

——ロケット・ストロース
「成層圏を狙い打つIS」事件と……。

~~~~~

「あの事件は時がたつにつれて人々の頭から消えてしまったけれども……」

あれは、誰だったのだろうか……。

「ねえ？しゃーくん？」

## 10万PV達成記念番外編（後書き）

今回はこの作品のキーワードにもなる「ロックオンストラトス事件」についてでした。

最後に出てきたキャラクターわかりましたか？

今回ののは束さんが語っています。  
もちろん最後のも束さんです。

~~~~~

今回も見てくださってありがとうございます。

皆様のおかげでこの作品もついに10万PV達成。本当にありがとうございます。

前回からはじめてます解説コーナーへの疑問、そして感想、くれると嬉しいですよ。

解説に関しては、物語の大筋に関わらない限りは出来るだけ解説させていたきたいと思います。

では、また次回会いましょう！

リクエスト作品（前書き）

今回は灰人様のリクエストで変態の目線で書かせていただきます。

灰人様。リクエストとは少し変わってしまうのですが、卸ければ見ていてください。

リクエスト作品

IS学園、入学式の日……

~~~~~

リクエスト作品第一回／オルカレイ変態の思い込み……「思い込みって恐ろしいな」

~~~~~

変態SIDE

よう！この作品のオリ主、オルカレイ・箕徒様だ！

今日は待ちに待ったIS学園の入学式だ。

グフフフ、待ってるよIS学園……フラグをたてまくってやるぜ！

俺様は俗に言う転生者だ、死んだのは、神の気まぐれだが特典をくれて記憶を引き継いで転生させてくれるというテンプレ展開だ、殺されたのはム力つくが好きな世界に転生させてくれたからな、許してやる。

神から貰った特典が聞きたいか？しょうがないから教えてやるよ！

銀髪にオッドアイのイケメンだ！

ふふふ、これで、大抵の奴は落ちるぜ……。

あとはISの世界に行かせてもらったってのはさっき言ってたことでわかっただろう。

ここは美少女の割合が大きいからな！

あとの特典で俺は専用機と千冬並みの身体能力をもらうつもりだったんだが数が足りなくてあきらめた。

だが、専用機は束にフラグを立てればもらえるだろう。

「箕徒君。次は貴方の番ですよ！」

「わかりました」

ふっ。いつもと違うって？

第一印象は大事だからな。

「オルカレイ・箕徒です。よ……」「すみません！遅れました！（バシン！）」……。

誰だコイツは、俺様の自己紹介の邪魔をしゃがって……。

「うあああああああ」

「馬鹿者が遅刻なんぞ言語道断だ。とっとと自己紹介しろ」

コイツ……まさか男か？

俺様が主人公として活躍するためのライバルってか……ククク面白い。

「秦 刹狼だ。」

趣味は特にないが家事は全般的にできる自信がある。
一年間よろしく頼むぞ」

クインか・・・覚えたぞ・・・ククク早速叩き潰せるクラス代表
決定戦が楽しみだぜ・・・。

やっとクラス代表決定戦だぜ！

セシリアには初日のうちに話しかけたんだが・・・あれがツンデ
レとかいうやつなのか！！
まあいい。ここでセシリアを倒せば・・・グフフフ。

おっと、その前に目の前に居るアイツを倒さなければな。

アイツは原作にも出てこないくせに一夏の知り合いらしい。
クソ！おかげでフラグを搔っ攫うことができねえじゃねえか！

「クソッ！セシリアにフラグをとっと建ててえってのに男と当た
るとかついてねえ」

「悪いな・・・今ボクはかなり気性が激しいんだ。とっとと落とさ
せてもらふよ」

「お前みたいなモブが俺様みたいな転生オリ主様に勝てるわけない
だろ。お前わかってんの？ww」

マジ笑わせるぜ。

コイツみたいなモブにやられるかったの。

「織斑センセイ。もう殺^{ヤッ}してもいいですよね？」

「ああ。構わん。はじめろ」

「クイン・シヤラン、デザートストーム。目標^{フチコロ}を倒す」

あいつの動きが急に変わった・・・あの武器フアングかよ！

「ぐえあ！」

「ハハハ！もつと踊れ！その無様な舞を！」

何なんだよアイツ！強すぎるだろうが！？

「ほらほら！その程度かよ！」

「つく！」

あいつに向かって弾丸をばら撒くがすべて避けられ反撃を受ける。

「（なんだ！？どうなってやがる！？俺様は転生オリ主だぞ！？）」

「・・・飽きた。もう本格的に狙い打つ」

肩、腕、足、武器と順番に破壊されていく。

「（嫌だいやだいやだいやだ！俺様が此処で負けるはずないのに！）」

アイツはその間に俺様に急接近して銃を向けていた。

そして、打たれたところからも意識はなかった。

起きたのはもう、個人トーナメントの2日前だった。

「くそ！アイツ次はぶっ殺してやる」

そして、俺様の最強伝説を始めてやるよ・・・ククク、ハハハハハハハハハハ！！

S I D E O U T

29話（前書き）

ついにクラスリーグマッチも終了。

長かったですね。

あと、1、2話ほどで一巻も終わりです。

では、本編どうぞ。

29話

「っち！当たらない」

ボクの一撃。

普通なら避けられそうもないそれを、敵は避け続けていた。

「くっ……！」

そして、一夏も攻撃する。が、一夏の斬撃はかすることすらしない。もうこれで4度目のチャンスだった。

「一夏っ！ちゃんと狙いなさいよ！」

「狙ってるっつーの！」

普通ならかわせるはずのない速度と角度での攻撃。普通の敵なら既に戦闘不能に陥っているはずだ。

――だが。

「なんて素早さなの……っ、コイツ！」

その装甲の厚さとは裏腹に全身に付いたスラスタ―の出力が尋常ではなく、零距离から離脱するのに1秒とからない。

しかも、どれほどファンが注意を引こうが白式の攻撃には反応して離脱する。

まるで、理屈ではなく脅威度で攻撃を見ているかのように。

「（何であたらねえんだ。）」

ドオン！

ファンが衝撃砲を撃つがその巨体に見合わぬすばやさでよけられる。

「コイツ、速い……!」

「これじゃ、あまり攻撃は当たらないね」

一夏と、奏が話しかけてきた。

「奏、君は弾薬もエネルギーも少ない、一旦ピットに……」(ド
オオオオオオン!!)……なんだ!？」

急いでハイパーセンサーで確認するとアリーナのシールドを突破し、
オルカレイ変態がこっちへ向かってきていた。

「おい、大丈夫か？」

……コイツの頭が大丈夫なんだろうか?……。

シャランSIDE OUT

オルカレイSIDE

フフフ、主人公のオルカレイだ。

今まで長い間休んでいたが待たせたな!俺様の参上だ!

ドオオオオオオオオオン!!

「やっと入ってきやがったか」

「キャーーーーー!!」

「なに!?なにが起こったの!？」

「助けてお母さん!!」

「ちい、人が邪魔で動けねえ。」

「これじゃあ、ISも起動できないじゃねえか。」

「ちい、めんどくさいが起動！」

俺様は周りを気にせずISを起動した。

そして、ありったけの武器でアリーナのシールドを破壊した。

「おい、大丈夫か？」

そして俺様は白馬に乗った王子様のように颯爽と現れた。

「あ、ああ。今のところはな」

「だが、攻撃を与えられていない」

ちっ！またコイツか。どれだけ俺様の邪魔をする気だ。

そんなにフラグを建てたいのか？　たく変態が！

「なら、そのモブと鈴と奏と一夏で援護しろ。俺様がトドメをさしてやる」

「ちよっ名前で呼ぶな！そして、命令するな！」

「アンタなんか名前前で呼ばれても嬉しくないんですけど・・・シヤラン君のほうが格好いいのに」

奏と鈴が照れ隠しをしてくる。

・・・そんなに照れなくても。

「だいたい、一夏にどうやって援護しろっていうのよ。バカなんじ

やないの!？」

「やっぱりシャラン君と違ってその目も節穴なんだね」

なんか言ってるが気にしない。

ハッ!ここで一発決めて鈴といつもあのモブにくつついてる可愛^奏い子のフラグを搔^奏つ攫^奏つてやるぜ!

変態SIDE OUT

シャランSIDE

うわぁ、今なんかコイツの頭の中見えた気がするよ。

しかも、アイツ話聞かないで出て行きやがったし。

「仕方がないか……」

「なぁ、シャラン」

「なんだ一夏」

「なんかあれなんかに似てないか？」

・・・は?なんだ?

「なににだよ。まさか駒とか言うなよな」

「違う。なんか機械じみてないか？」

「ISは機械じゃない。」

「そういうことじゃない。もしかしてあれ無人機じゃないのか？」

「無人機!?でも、ううん。無人機なんてありえない、ISは人が乗らなきゃ動かないのよ。」

「それに証明できるのか？」

「いや、そうじゃない。でも、無人機なら勝てる」

「何？仮に無人機としてどうするの？」

うむ。確かにそれは気になるな。

「あ、あの、私を忘れてもらっても困るんですけど」

「わるい奏。君は下がってもらえるか？」

「いや、私も戦います」

「でも、君は……」
「一夏！」
「……」

さっきから邪魔されてばかりじゃない？ボク。

『男なら、男ならその程度の敵に勝てずになんとする!』

「つち！鈴！打てええ！」

「うん！」

ファンは衝撃砲を撃とうとしたがその射線上に一夏が入った。

「何やってんのよ！」

「いいから撃て！」

「ええい！どうなっても知らないからね！」

ドオオオオン！

一夏の背に衝撃砲が撃たれる。

「いっけええええええええええええ！」

そして、急加速して無人機を切り裂いた。

・ ・ ・ 終わった。そう思ったがそのとき、

——敵機にロックされています

だが敵は残った手で一夏たちを撃とうとしていた。

「っ！やめろおおおおおおお！！」

ボクの中で何かが弾けた気がした。
理性とかではなく、他の何かが。

——リミッター解除されました。全機能使用できます

・・・こんな土壇場で起きるなんてね。
でも、悪くない。

——ワンオフ・アビリティー単一仕様能力『トランザム』及び、特殊能力『ゼロ』発動可能

「おちろおおおおおおお！！」

相手の行動がすべて見える。

ボクはその腕をソニックブレードで刺し貫いた。

そして、ボクは本能で感じたままライフルを構え、アイツが撃つ前に打った。

そして、予想外に威力の高い一撃で今度こそアンノウンは停止した。

「よかった・・・守・・・れて・・・」

ボクはその言葉を最後に気を失った。

シャ
ラン
SIDE
OUT

29話（後書き）

今回はもうひとつの能力について。

シャ「やっぱり束さんがつけた機能は規格外みたいだな」

そりゃそうだよ。

未来予知ができるなんてふつうはないからね。

シャ「ぶっちゃけるとガン・ムWの『ゼロシステム』だな」

そうだね・・・。

・・・あ、途中で変態無視して空気化させちまったわ。

シャ「ま、いいんじゃないかな」

~~~~~

今回も見てくださってありがとうございます。

シャ「おかげさまで10万PV突破と1万ユニーク突破、お気に入りが50件突破しました」

ものすごく感謝ですね。

シャ「こんな作者が書く作品ですがこれからもよろしく願いします」

感想なんかもくれると嬉しいです・・・って毎回これしか言ってな

いや。

シャ「まあ、いいじゃんか。

また次回も見てくださいよな！」

またね！

### 30話

ザァン。ザァン。

ボクは気がついたら砂浜の上に居た。

制服を着て、手に靴を持った状態で。

――～

ボクは聞こえてきた歌に引かれていくように近づいていく。

詠っていたのは一人の少女だった。

そして、近くの木に腰掛けた。

「~~~~~♪~~~~~♪」

静かに聴いていたとき、不意に声をかけられた。

「貴方はまだ此処に来るべきじゃないわ」

「・・・え？」

「だから、今は起きて」

なんだろう・・・。その声は何処か懐かしいものに聞こえた。

「きっとそのときがくるから今はもう起きて」

彼女のその声を聞いたときにはボクは浮き上がるような感覚とともに気を失っていた。

シャランSIDE OUT

30話／戦後のひととき

奏SIDE

「（はあ、シャラン君大丈夫かな．．．．．）」

私は今、保健室へ向かう廊下を歩いていた。

「（でもなんで倒れたんだろう？）」

彼は砲撃を放って直ぐに倒れてしまった。  
なぜなのかわからないが。

「（とりあえずは様子を見てみないと）」

プシュ

空気の抜ける音と共に扉が開いた。

「まだ寝てるか．．．．．」

そこに居たのは私の大好きな人シャラン君が眠っていた。

「なんで好きになっただけ……」

思い返されるのは夏のある思い出……

~~~~~

私が小学3年生になった年の夏の暑い日。

私は川に来ていた。

「うん。つめたいつ！」

私はただ涼みに来ていただけだけど、そこは人で溢れかえっていた。

私は川の中を歩いて進んでいました。

だけでも途中で転んでしまい、流された。

誰にも気付かれず、流され続けて、「もう、ここで死んじゃうのかな？」なんて思ったりもした。

でも、そのとき……

「大丈夫!？」

一人の男の子が私を見つけて、助けようとしていた。

「ボクの手をつかんで！」

「う、うん!」

その時は無我夢中だった。

ただ、生きたいということだけで動いていた。

5分後、私たちは川の近くの陸地に上がっていた。

「はあ、はあ・・・よかった間に合って」

そう言っただけで彼は私に笑いかけた。

その笑顔はまるで太陽のようで・・・とても格好よかった。

~~~~~

「それがシャラン君だったんだよね」

まあ、今のシャラン君も格好いいんだけど。

「う、うん・・・・・・・・」

「シャラン君？」

「うん・・・・・・・・？・・・ここ、は？」

「良かった・・・目が覚めたんだね・・・・・・・・!!」

私の目から涙が零れ落ちる。

「か、なで・・・・・・・・？」

「よかった・・・本当に良かった」

「な、何で泣いてるの！？ねえ、ちよつと!？」

私はシャラン君が起きたことが嬉しすぎて、つい、彼に抱きついて

しまった。

奏SIDE OUT

シャランSIDE

「う、うん．．．．．」

此処は．．．．．？

「シャラン君？」

「うん．．．．．？．．．．．ここ、は？」

ボクはアリーナで無人機と戦って、それで．．．．．どうしたんだっけ？

「良かった．．．．．目が覚めたんだね．．．．．！！！」

彼女の目から涙が零れ落ちる。

「か、なで．．．．．？」

そこに居たのは奏だった。

「か、なで．．．．．？」

「よかった．．．．．本当に良かった」

「な、何で泣いてるの！？ねえ、ちよつと！？」

え！？え！？なんで！？ボクなんかした！？

しかもしっかりと抱きついてるし……。

「本当によかったよお」

なあんだ。なんで泣いてるのか……考えればわかるじゃないか。

「ごめんね。心配かけさせて」

「うん……!!」

うつ。なにこの可愛い生物。

ついつい頭をなでちゃったじゃないか。

プシュ

「シャラーン。失礼す……る……よ?」

「……え?」

「あ、ゴメン。ごゆっくりね?」

「え、ちょ、ま、」

「しっかりと相手のことを考えてやるんだよ?」

「ちよつと待て瑞貴!そんなじゃない!」

「わかつてるって。じゃ、またね」

「だからちがー……う!」

ボクは瑞貴を追い、そこを飛び出そうとしたが、ふらついてしまいまろに奏に抱きついてしまった。

「っ………//」

「//」

奏は顔を真っ赤にしてうつむいていた。

多分、ボクも似たような状態だろう。

「ご、ごめん／＼」

「い、いやべ、別にシャラン君ならいいよ・・・むしろもっとして欲しいくらいで・・・」

すぐに離れ謝ったが、普通に許してくれた。

最後のほうはなにを言ってるかわからなかったが。

「と、とりあえず、おやすみっ！」

ボクは逃げるようにしてそこを後にした。

部屋に帰ってももう頭が回らず布団をかぶって寝た。

ただ、その日の夜はいつもより気持ちよく眠ることが出来た・・・。

シャランSIDE OUT

### 30話（後書き）

みてくださってありがとうございます。

ネタが尽きてきたんで今回は休みです。

感想やここで解説して欲しいことなどは常時受付中です。

では、次回も見てくださいね？

### 31話（前書き）

今回は割と短めですね。

では、本編どうぞ。

### 31話

コンコン

朝の寮。誰かが尋ねてきたようだ。

「シャラン、一緒に飯くわねえか？」

「ああ。いいけど」

「シャラン、大丈夫だったか？結構心配したんだぞ。急に倒れたかな」

全く・・・こいつもか・・・まったく、ボクの周りには心配性な奴らが多いみたいだ。

「悪い、大丈夫だよ」

実のところ全然大丈夫じゃない。

あの、『ゼロシステム』は、相棒の普段の使用の比ではないほど脳に負担がかかる。

ボクでなかったら即刻脳が蒸発できるのではないか？

「にしても昨日のは・・・と話したら駄目なんだっとな」

「一夏・・・忘れたら駄目だろ」

「悪い悪い」

「そういえばあの変態はどうなった？なんか処分あったか？」

「アイツは昨日のあれの時邪魔したからな。自宅で一週間の謹慎中だ」

「自業自得だな」

「まったくだ」

ボクらは食堂につくと、一夏は相変わらずの日替わり定食、ボクはサンドイッチとパフェを頼んだ。

「朝からそんなの食べて居もたれしないのか？」

「大丈夫だよ」

やっぱり甘いものはジャスティスだね！

（そんなんだから影で実は女だろとか言われるんだよ b y 作者）

うるさい！

「そついや今日弾の家に行くんだけどお前も来るか？」

「ん？行く行く」

「じゃ、決まりだな」

「瑞貴も呼ぼうよ」

「ああ。一人だけ学校に居るなんてつらいだろうからな」

「んじゃ、9時に学校前ね」

「OK」

~~~~~

「瑞貴」

「ん？シャランかい？」

「そうだけど、今日は暇か？」

「まあ、やることはないけど」

「じゃ、一緒に弾の家に行かないか？」

「弾!？」

「おう」

「行くよ!久しぶりだなあ・・・弾に会った」

「じゃあ、9時に学校前にな」

「わかった」

~~~~~

### 31話/突撃!弾の家!前編

「で、やっと着いたな」

「ああ」

あれから少し時間が経ち、ボクらは今、弾の家の前に居た。

ピンポン

「いらっしゃーい」

「おう、来たぜ」

「1年ぶりかな弾」

「私は7年位ぶりかな?」

「・・・は?えーつと誰だ?」

それはひどくないか?

「おい、弾。シャランと瑞貴だぞ」

「は!?!おまつ、瑞貴か!?!」

「そうだよ。だから7年ぶりっていったじゃないか」

「本当に知り合いだったんだな」

「シヤランも久しぶりってか、何処行つてたんだ？」

まあ、いろいろあつたんだよ……（遠い眼）

「お前の顔見たらよくわかったよ」

「そうか、それは重宝」

「とりあえず中はいろいろぜ」

「「「ああ、そうだな／うん、そうだね」「」」

こうして、久しぶりの再会はすんだのである。

### 31話（後書き）

#### 解説

今回は弾がなぜ瑞貴を知ってるかについて。

そして、シャランが何故そのことを知ってるかについて。

シャ「ボクは瑞貴から聞いたからだね」

弾「俺はあいつと小学・・・何年だったかまで同じクラスだったんだ」

さいですか…………。

~~~~~

次回も見てください！

32話

「・・・で？」

「で？ってなんだよ」

前回に引き続き、ボクらは弾の家に居た。
メタ発言はよせて？気にしたら負けだよ。

32話 / 突撃！弾の家！
ISを動かしたかった
・・・弾が
後編

「お前IS学園でいい思いしてるんだろ？」

「してねえよ」

「嘘いえ。メール見ただけでも天国じゃねえか。なにそのヘヴン、招待状ねえの？」

「ないよ馬鹿」

それにね弾君。あそこはつらいんだよ・・・。

「まあ、いいや。瑞貴とシャランは何処に通ってるんだ？」

？言ってなかったかな？

「「IS学園だけど？」」

「嘘だろっ！？」

そこまで驚かれてもな……。

「ボクは数年前にもうISを動かしてたし……。」

「「は？」」

「馬鹿……。」

「ん？いや、だって一夏たちには隠し事しなくなかったし」

「はぁ……。言うなら全てちゃんといってくださいね。私だつて知らないこともあるんですから」

「わかつてるよ。えーっとまずはボクの本名からだね。」

ボクの名前は『レオン・アルファード』。改めてよろしくね」

その後、ボクはあつたことを全て言った。

ナタルさんたちのところでずっとISに関わってきたこと。

そこで偶然ISを動かしてしまったこと。

途中で会った束さんに誘拐まがいのことをされたこと。

それで名前を変えたこと……。それからそれから……。

「いろいろあつたんだな」

「まあね。それに、学校ちよくちよく休んでたのも専用機の作成のためだし」

「それはまた……。」

「ん？レオンってお前あのレオンか？」

「ん？」

「いや、だから小学4年までいた、あのレオンか？」

「ん？ああ。うんそうだね。あの時はレオンとして接してたもんね」

「ははは。私も学校で再会したときはビックリしたよ」

まっただね。

「てか、そのペンダントがお前のISか？」

「うん、そうだけど見てみる？」

「え！？いいのか？」

「どうせ動かせないしね」

「なら、遠慮なく見させてもらおうとするか・・・ISの待機形態に触ることなんてないからな」

そりゃあ、そうだろうね。

「うん？デザート・・・ストーム？」

弾がそう言ったとき、異変は起こった。

気がつくやうに弾はISを装備していた。

「うお！？なんだ！？」

「弾までISを動かしちゃった！？」

「ははは・・・」

「ボクの相棒が！？」

ボクが言うのもなんだけれども、人に自分の専用機が使われるのはなんかアレだよね。

「馬鹿兄！さつさとメシ食いに来い・・・って・・・ば？」

「おう、蘭・・・IS・・・動かしちゃった・・・」

「へ？」

「え~~~~~~~~~！！」

そしてその声が近所に響き渡った。

~~~~~  
~~~~~

「ふむ……まさか五反田まで動かすとはな……」
「えーっと……アハハハハハ」

ここはIS学園。
さつき弾がISを動かしてしまったがために此処に帰ってくる羽目に会った。

千冬さんが弾のことを普通に知ってるのは何故って？
ボクの影響も少なからずあったみたいだけど、一番は一夏が千冬さんも誘って皆で焼肉パーティを行ったとき、千冬さんが一夏の友達として認めたからだろう。

「でも、良かったよ。また一人男子が増えたからね」
「そんなにひどいのか？」
「ははは。少なくとも弾が思ってるほどいいことではないよ」
「それは、まあ……つらそうだな」
「他人事じゃないよ。今日から弾も仲間入りなんだから」
「そうだったよ」

弾は綺麗なorzをしていた。

「まあ、これからよろしくね弾？」
「またよろしく頼むぜ弾！」
「久しぶりに一緒の学校だね、弾」

「ああ。よろしく頼むな皆」
「「「ああ／うん」」」

こうして、また一人心強い仲間が増えたのである。

33話

「はぁ………。なんでボクが弾の尻拭いをしなきゃいけないんだ？」

「お前にはこの後五反田専用打鉄を改造しなければならないからな」

「なんで打鉄を？」

「なんでも、凡庸機でのデータも欲しいらしい」

「ああ、そういうことですか」

「それにしてもアイツ、なかなか粘るな」

「そうですね」

どうも、みんなの主人公シヤランです。

弾は今、目の前の闘技場で試験官——山田先生と戦っている。

素人にしてはとても粘っている。

「近接も射撃もまあまあか……器用貧乏というやつか」

「弾もちゃんとやればできる奴ですから」

「そこは普通否定してやる場所ではないのか……？
まあ、いい。そろそろ決まるな」

ドゴオオオオオン！

ビーーーーー！！

勝負は織斑先生が言った直ぐ後に終わった。

結果は弾の負けである……まあ、勝てたら凄いが。

「勝敗が決したみたいなんで弾を迎えにいつてきます」

「なら、迎えにいつて此処に戻って来い。言わねばならんことがある」

「了解です」

そういつてボクはアリーナまで弾を迎えにいった。

~~~~~

「弾！」

「シヤランか。結局負けちまったな」

「そう気にすることじゃないよ。」

誰だつて最初はそうさ」

ボクだつて最初はかなりやばかった。

だつてミサイル全部落とせなんていきなり言われたんだぞ。

無理に決まつてゐるじゃないか！

「お前に言われるとなんかムカツク」

「そついわないでよ。」

それよりも、はやく行くぞ。織斑先生が待つてゐる」

「マジかよ！早く言えよ！急ぐぞ！！」

ボクらは急いで戻った。

~~~~~

「遅い！」

バシン！

入ってすぐにこれである。

ひどすぎるのではないだろうか？

「まあいい。呼んだのはコイツを渡すためだ」

そういつて投げ渡されたのは銀色のプレート。

言うまでもない。打鉄の待機形態である。

「早いうちに行っておけよ」

「了解しました」

織斑先生はそれだけを言って出て行った。

「じゃ、弾。早速いくか！」

「……は？」

「は？って行くんだよ。整備室に」

「なんでだよ？」

「弾の専用機製作しに」

「へーって……えゝ！！」

ん？どうかしたんだろうか？

「俺専用の機体……だと！」

「ああ、うん。打鉄の改造機だけど」

「よっしゃああああああ！！」

「うるさい！」

バゴン！

「いつつ~~~~~!」

「とつとと行くぞ弾」

ボクは弾を引き吊りながら整備室へ向かった。

33話ノ弾と彼女の出会い・・・なんかボクって邪魔者だなあ・・・。

——整備室——

「ここが整備室。」

当分は此処にお世話になるから忘れないでね」

ボクが説明してる間も弾は周りを見渡してキョロキョロしていた。

？「・・・また来たんですか？今度は一体どのような用件で？」

「・・・あ、虚さん」

この人は布仏 虚さん。

3年生の整備科である。

そんな虚さんと挨拶をしていたら、弾が話に入ってきた。

「なあ、シヤラン。この可愛い人は誰だ？」

「ん？この人は布仏^{のほとけつつほ} 虚さん。」

生徒会に所属してるボクらの先輩だよ」

「はははじめまして。布仏虚と申しませう……」

「ここここちこそは、はじめまして五反田弾です……!」

何だろうねこの二人……。

「今はこの……弾の専用機、とは言っても打鉄の改造機ですが与えられるんで、その打鉄の改造をしようかと」

「あ、ああ、そうだったの。じゃ、じゃあ……」

「ボクがデータの改造などを行っておきますので、弾君にISの基本を、二人きりで、レクチャーしてあげてください」

「ふ、ふふふ二人きりで!!?」

「はい、二人きりで」

「わ、わわわわかりました!」

「弾、君はどんな機体がいいんだい?」

「俺か?俺は……できれば万能なのがいいな。+速さで」

「了解……。虚さん。銃火器と高速戦闘についてのレクチャーも追加で頼みます」

「ふえ!?わ、わかりました」

これで役割も決まったし……。

「では、今日はここで解散としましょう。」

弾はあとで虚さんに教えてもらって職員室へ行くこと。以上」

それだけ言っで、ボクは此処を出た。

だって、なんかもうすでに甘ったるい空間が形成されかけてるもん!

はあ……。ホントボクってなんか邪魔者みたいだしね……。

(虚さんの目が物語っていた)

・・・もう寝よ。

シャランSIDE
OUT

34話（前書き）

どうも、久しぶりの更新です。

いやあ、構想とかは決まっていたんですけど時間がなくてですね・・・。

このテストエって感じです。

では、34話どうぞ。

34話

次の日……。

いやね、結論から言うとな……

「今日は転校生が着てます。しかも3人です！」

いや、ワスレタワケじゃないンダヨ。ホ、ホントダヨ？

34話／転校生はブロンド貴公子？
ジェントル

「……………」

まずは一人目、ラウラ・ボーデヴィツヒ。

ドイツのシュバルツウア・ハーゼ——通称黒ウサギ隊の隊長で少佐。ちなみにドイツの代表候補生。

あと、胸がちいさ……は考えるのはよそう。さっきまで興味なさげに見回してた目がこつちを睨んでるから。

「アハハハハハハハハ」

こつちはシャルル・デュノア……正確にはシャルロット・デュノアなんだが、説明は後回しだ。

男装美少女でフランスの代表候補生。

瑞貴が惚れた女で・・・まあ、これくらいか？

にしてもジックリ見ればわかるだろ。体とか細すぎるし。（↑自分のことを忘れてる）

「・・・・・・・・・・」

こっちは弾だな。

完全に固まってしまってる。

そりゃあ、紺だけ死線（誤字にあらず）が集中してればそうなるわな。

「自己紹介をしろ」

「はい、教官

・・・ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

・・・・・・・・これだけ？

・・・いまクラス全員の思考が一致した気がする。

そうしている間に彼女は一夏の前に来て・・・。

パシン

「私は認めない・・・貴様が教官の弟であるなどと！」

そういつてこっちに向かってきた・・・・・・・・て、こっちに！？

「お会い出来て光栄ですロックオン・ストラトス！
まさか男だとは思いませんでした」

「・・・へあ？」

「できれば今度私に狙撃のコツなどをお教えいただけませんか？」

「え・・・？まあ、今度一回だけなら・・・」

「ありがとうございます！」

そういつて彼女は席に向かっていった・・・なんでだ？

「え、えーっと・・・シャルル・デュノアです。よろしくお願いします」

「え・・・・・・？」

今度は瑞貴か。

「？知り合いなのか？」

一夏が瑞貴に聞いた。

「い、いや、知り合いに似ていただけだよ」

「そうか」

「え、えーっとこちらにも似たような境遇の人が居るということ
で本国から転入してきました」

「よろしく願います」

「え？俺が最後か？」

「んん！えーっと五反田弾だ。一応そのシャランと一夏とは友達
に当たる。」

「これからよろしくな！」

・・・・・・。

キヤ――――！！

またか
・
・
・
・
・
。

「また男の子だよ！」

「今度はブロンドに茶髪だ！」

「あっちのこは守りたくなる〜！」

「私はあっちのこの方が……」

「んん！静かにしろ。ではデュノアは刃雅、五反田は織斑・・・は心配だからクイン、お前らが面倒を見る」

「了解／了解です」

「なんで俺は心配なんだよ千冬姉!!」

ズガン！！

「織斑先生だ」

「は、はい織斑先生……」

また一夏は拳骨をもらっていた。

・
・
・
学習しろよ。

「次はIS実習だからな、遅れることのないように！」

「はい！」

ってことはヤバイ！

「弾！それに一夏、瑞貴にデュノアも、急がないと！」

「あ／うん」

「
」
「？」
「
」

こうしてボクらは転校生二人を引っ張って教室を出て行った。

34話（後書き）

シャ「ついにヒロインも勢ぞろいってところだな」

ここからが正念場だね。

シャ「そしてやはり変態は空気化（笑）」

さすが変態だな（爆笑）

シャ「とりあえず見てくださってありがとうございます」

次回も楽しみに待ってくださいると嬉しいです。

では、また次回。

35話

でさ・・・。

「なに！？IS操縦者ってこんなに無駄に身体能力高いの！？バカなの？死ぬのおおおお！？」

「なんでこんなにはやいんだよおおおおお！」

「畜生、慣れたと思ってたのにiiiiiiiiiiiiiiiiiiii！」

「こ、こんなのが日常なおおおお！？」

「なにこれこわiiiiiiiiiiiiiiiiiiii！？」

上から順にボク、瑞貴、一夏、シャルル、弾である。

『待つて~~~~~~~~!!』

そして後ろからは大量の女子女子女子・・・。

怖い！メツチャ怖いんですけど！？

35話／授業？戦い？なにそれ怖い 前編

プシュ！

な、なんとか到着・・・。

「ハアハア・・・だ、大丈夫か？」 ↑ボク

「ああ、俺は何か」↑一夏

「結構・・・きついかな・・・？」↑瑞貴

「なんで・・・あんなに・・・はやいんだよ・・・」↑弾

「もう・・・無理・・・だよ・・・」↑シャルル

皆、かなり疲れてるね。

そりゃ、あんなのに追いかけてればこうなるな。

「と、とりあえず早く着替えよう」

「ああ、そうだな。遅れたらシヤレにならない」

「あれだけは私も喰らいたくはないからね」

ボクらはそういつて着替え始めた。

シャルルは着替え始めたら直ぐに顔を赤くしてうつむいたけど・・・。

——あ、シャルル本当は女だった。

「瑞貴」

「わかってる。任せて。シャルル？聞きたいことがあるからちよつといいかな？」

「え？み、瑞貴！？どうしてここに・・・」

「それはいいから、ホラ」

「う、うん。ちよつと待って」

そういつて二人は此处を離れた。

「よし！着替え完了！」

「俺もだ」

弾君は手間取ってるみたいだし・・・。

あ、着替え終わった。

「じゃ、行こうか」

「「ああ」」

ボクらはとりあえず瑞貴たちを置いて、先に出て行った。

シャルンSIDE OUT

瑞貴SIDE

どうもはじめまして。刃雅瑞貴です。

今は、シャルル……いや、シャルロットとともに居る。

「な、なんで此処に瑞貴がいるの!？」

「え、えーっとね……言つと長くなるんだけど……部屋は一緒になるのかな？」

私が無気なく言ったのだが、シャルルは過剰に反応して、

「本当!？」

「え!？何?……それよりも近いよ／＼」

「あ、ごごごめん!／＼／＼」

いや、嬉しいけれど、これじゃあ、ねえ……。

「いや、いいけど……／＼」

「そ、そう……／／」

これはかなり気恥ずかしい……。

ってなにか忘れてるような………？

「ああ！実習もう始まつてるよ！！」

「ええ！？」

「どどどどつしよう！！？」

どうしよう！？絶対怒られるよー！！

「……おい」

「ひつ……織斑先生……」

「クインから事情は聞いている。早く来い」

「……へ？」

「ん？違うのか？アイツは「シャルルが忘れ物をしたので瑞貴と一緒に取りに行ったんで遅れます」といつていたが」

「いえ！本当です！」

「そうか。では行くぞ」

「「は、はい！」」

これは、とりあえず助かったのかな？

あとで、シャランにお礼を言っておかないと………。

瑞貴SIDE OUT

35話（後書き）

今回は授業内容まで行くはずだったのに……。

畜生！いけなかったよこのやろう！

はぁ、つかれた。

シャ「大変だな」

全くだね。

シャ「自業自得だけど」

グハア！

シャ「まあいいや。見てくださってありがとうございます」

そろそろ15万PVいけそうです。

シャ「それはすごいね」

読者の皆様のおかげです。

これからも応援よろしくお願いします。

シャ「感想待ってます！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0813u/>

IS <インフィニットストラトス> 成層圏を狙い打つ男

2011年10月2日21時25分発行